

---

# 転生したら史上最弱の妖怪だった

ribo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生したら史上最弱の妖怪だった

### 【Nコード】

N2950M

### 【作者名】

ribo

### 【あらすじ】

ゆつくり氏ね！！違った。ゆつくりして行ってね！

この物語はわかれあり、であいありの復讐活劇さ！

復讐対象？転成させた紙。違った。神だ。

だったらいいな、と思ってる。

あと、作者を叩くときはパソコンのディスプレイか、携帯の画面を叩けば届くよ！（機器が壊れた場合作者は一切の責任を負いません）

更新速度はゆっくりです。主人公だけに。

オリ主最強キターーーーーチート、チート。(前書き)

ゆっくりが何かわからない人はwikiみてね

あと、これは『上海アリス幻樂團』様の弹幕STG『東方Project』シリーズの二次創作・幻想入り物です。  
本家様とは一切関わりのないものなので。  
と、言うか二次創作かすら怪しい。

## オリ主最強キターーーーチート、チート。

死んだ。何を言っているかわからない人のために。もう一度言おう、死んだ。

死んだのにこんなにモノが言えるなんて思ってもみなかった。多分、俺は落ち着いてるんじゃないやあなくてよく解ってないんだと思う。俺はどう死んだかよく解ってすら、ないんだから。ただ、死んだと言う事しか判らなかった。

そして、迎えもないも来ないので、俺はなぜ死んだのか考えていると声をかけられた。

「よし、EA102番さ〜ん。席に着いてくださ〜い」

声をかけられた方を見れば、長机に人が二人座っている。その反対側、俺の方には誰も掛けていない椅子が置いてある。

席に着け、と言うのはこれに座れと言うことだろうか。俺はよく解らないままに椅子に腰かけた。

それから冷静になつて辺りを見てみると、自分が座っている椅子の前には長机。それを前に座っているかっこいい人とその横に羽根の生えた人がいる。

いや、前者の人は家を出ればどこにでもいるような人なんだけど、後者の人は羽……はね……羽!?

どうして人に羽が生えているの……い、いや、俺はもう死んでしまったんだ。何が来ようとも驚いていられるか。死んだら死神でも来るのかと、待ち構えていたじゃあないか。

色々と、処理のできていない俺に、羽が生えている方が、ため息混じりに話しかけてきた。

「はあ〜、EA102番さん。席に着く前は失礼しますでしょうが。

減点ですね」

羽が生えている人は、顔を下に落とすと何かを書いているようだった。

え、なんなの？ 面接ですか。

「それでは、EA102番さんの転生面接を始めます。書記の天使いいですか？」

「はぁーい。いつでもどうぞです」

把握できない。どう言うことですか。

「EA102番さんははじめて死んだのでわからないと思いますので説明しますね」

「えっと……お願いします」

「この転生面接はあなたの生きてきた中での行いを判定し、次にどんな命へと生まれ変わるかを判別します。そして、場合によっては特典が付きますが、ここ最近そーいう人いないんで省きます」

死ぬと、面接があるなんて思っても見なかった。知っていたら絶対に死なない様にかんばって生きていけたのに。

しかし、いくつかよく解らないワードが混じっているんだが。

「えーでは、開始しますね。EA102番さん、あなた人を殺したと思ったことはありませんか？」

「いきなりドキつい質問ですね！ そんなの面接で聞かれたらどう答えたらいいかわからないでしょうが！」

あっ、と思つて口を手で塞いだときにはすでに遅く、書記らしい天使さんはまた顔を下に向けて何かを書き出してしまった。

おふざけみたいな面接だが、どうもちゃんとしなさいといけないよ  
うな、いい知れないモノを感じたのでキチンとすることにした。  
人を殺したいと思ったことが……。

小学三年生のとき、友達の友ちゃんに雑巾投げつけられた時かな。  
それとも中学二年のときの友達の友にゃんにカーテンで首絞められ  
た時かな。

それか高校一年のときのいきなり後ろからドロップキックの友達  
の友なん、かな。

「はい！ あります」

思い出したら腹立ってきた。

「あー偉く言い切りますねえ。最近の人間は度胸なしとっていた  
んですが……」

と、言うことはこのさえない人も人外だったりするのだろうか。

「少し質問の趣向を変えてみましょうか。じゃ次に……二次小説を  
読んだことはありますか？」

偉く変わったモンだなあオイ。

二次小説？ SSとかのことかなあ。それならあるな、よく読ん  
だ。

「はい、ありますよ」

でも何でこんなこと聞くんだろう。

「ほほう。ではオリ主、転生、チートものとか読んだことは？」

それ系すっげ大好きだ。アンチとかも多いけどやっぱ男なら最強でしょう。

「はい、ありますよ。大好きですね」

「……ニヤ。では、次にもし、オリ主最強になれるなら、なりたいですか？ なるなら行きたい世界とか」

んー俺がオリ主で最強か。実際成ってみると大変そうだが、楽しそうではあるよなあ。どちらかと言えばやってみたって気持ちが強いな。

場所か……オリ主で最強なら女の子にモテモテだよな。なら、女の子の多い東方とかいいんじゃないかな。

「成れるなら……成りたいですね。場所は東方の幻想郷とかで」

「ほう……なぜ東方なんですか？」

「いやー恥ずかしい話、女の子にもてたいですからね」

「フフ……なら貴方は東方の世界に転生です。決まりました。今決めました」

……？ えっと、この人が言っている意味は……幻想郷にいける。行ける。

「本っ当ですか！？ 嘘じゃあないですよねえ！！」

「フフフ、はい。金魚みたいにパクパクしておもしろいですよ」

「あっ、すみません」

「では、こちらですべて設定しておきますね」

しかし、こんなにも簡単でいいのだろうか。

「それではしばし休息をどうぞ」

まあ、深く考えることはないか。

心配することはない、と思った俺の意識は流されるままに落ちていった。

彼の意識が糸のようにプツリと切れた後、羽の生えた 天使は背を伸ばして気を抜いていた。

そして気の毒そうな目を彼にしつつ、隣の 人外に話しかけた。

「あーあ、またこの人のいじわるが始まった」

「いいじゃないですか。オリ主最強になれるという幸福がちょっとだけ楽しめるんですから」

どうも天使が攻めている様子だが、全く悪いと思つた様子はない。

「全くこの人は……この前の人はなんでしたっけ？」

「前の人ですか？」

「そうです。誰が見てもそういう人だなって解るような人でしたけど」

「確か……リリカルな世界でオリ主最強になりたいと、言うものですよからリンカーコア持ちにしてあげましたよ」

天使の顔は相変わらず人外に対して、不満のある顔をしている。

だがそんなことは気にもせず、人外は楽しそうに笑っている。ある意味才能である。

「その妙な優しさでその人は一体どれだけ絶望したか……たしか魔力が雀の涙ほどもなかったんでしょ」

「ええ、あの魔力測定をしたときの顔は見ものでしたよ」

その人外の表情は、天使の冷ややかな目など関係無しに笑っている。例え、いくら天使が言おうとも、彼の表情が変わることはないのだろう。

「えげつないですね。で、また今回も同じなんでしょ？」

「当たり前じゃないですか。」そういうこと”をするためにこんなことをやってい

るのです」

「相変わらず暇なんですねえ。それじゃあこの人はどうするんですか？」

「そうですね……妖怪にでもしてあげましょうか。人を殺したいと言っていましたし」

(思う、だったはずじゃあ……)

それでも天使は余り強く反論することはできないようだ。二人の間では、上下関係があるようである。

それでも、ついつい口から出て来る言葉は天使にとって本心には変わりない。

「妖怪ですか。どんな妖怪ですか？ あかなめあたりですか？」

「もつとすごいのですよ。想像にも及ばないのを用意しておきます」

いたずらを仕掛けた まるで無邪気な子どものような笑顔。た

だ、その笑顔の意味を知っている者からすれば、悪夢でしかない。唯々、その矛先の幸せが長く続くようにしか祈ることができないのだ。

（この笑顔は本当に突拍子もない時の顔。あの人大変だろうな。合掌）

しかし、天使も薄情だった。

「それに特典を付けておきましたから」

「え、本当ですか！？ 珍しいこともあるもんですね。で、どんなのですか？」

「体が”少し”頑丈」

人外の口から出てきた特典はなんともお粗末なものであった。それを聞いた天使は、本当に申し訳なさそうな顔をして手を合わせた。

「……合掌」

それを見た人外は何を思ったのか、少し考える仕草をして、良いことを思いつ

いたような顔で笑って言った。

「ちなみに記憶引き継ぎ」

「本当にありがとうございました」

こうして、今回の不運なオリ主が生まれるのであった。

オリ主最強キターーーーーチート、チート。(後書き)

叩くときはパソコ)ry

チートだお。

グニヨグニヨ、と何か液状のような粘りが強い物が動く音がする。  
ん？　ここはどこだ？

辺りは真っ暗闇、ではなく俺の目が開いていないだけのようである。どうしてこうなったのか、浅い思考の海に潜ってみると、すぐに答えが浮かんだ。

そうか、俺は転生したんだったな。しかし、いざ生き返ったと言われても、実感なんて湧くようなことでもない。ただ、ベットから出てしまえば夢と思えてしまえるようなことだ。

それでも、俺の感覚は何か違っていて、もう違う者になってしまっていることを示しているみたいだ。

グニヨグニヨ、また同じように動くような感じがする。これはまるでどこかに押し出そうとするような動きが……ってもしかしてまだ母親の腹の中か！？

閉じたままの目につつすらと、明かりを感じる。そんなことを考えている間に、俺の全身は外気にさらされた。

ポン！　という軽快な音と共に。

はぁ？　ポンってどんな生物から生まれたらそんな音が鳴るんだ？　そう思った矢先、小さな痛みが走り、ごつごつとした地面のような感触が全身にわたる。しかも跳ねるはねる。

どうも、飛び出した衝撃でばよんばよん、と擬音が鳴るような感じで跳ねているようだ。一体どんな生物なんだ……俺はオリ主で最強じゃないのか。

そしてわずかながら開くようになった両目を、一体どんな親か顔

を見てやるっと思つて頑張つて開けてみれば。

俺は絶望して、開けなければそのうち気づいて絶望して、死ねば幸せだったに違いない。

「うゝ、れみーのぷりていなあかちゃんがつまれたんだど〜」

満丸お月様みたいなお顔がそこにはあった。誰が見ても少しふくよかな体型をした子どもにしか見えない。それに加えて天真爛漫、と言つのか無邪気な笑顔。

とりあえずどこに出しても惜しくない子どもみたいな奴である。

子どもみたいな。……子どもみたいな。

どう見たつてゆっくりです。どうしようもない、救いようのない、”妖怪”である。

「うゝ、うゝあうあ〜れ みり あ うゝ〜」

そして知ってる人は知っている、かの有名な『レミア・スカールレット』を模したゆっくり、『ゆっくりれみりあ』である。

何が嬉しいのか、先ほどから『うゝ』だの『だど〜』等言っているがそれは彼女の口癖や語尾みたいなモンである。

「うゝ？ れみーのあかちゃんどうしたんだど〜？」

……待て。今ものすごく大変なことを言わなかったか。ここには俺とこいつしか居ない。がんばつて確かめた。

なら、今のこいつの発言と俺の状況は何だ。俺はこいつの腹から生まれたんだ。つてことは俺つてまさか……。

俺は見たくないが、すごく見たくないが、頼まれたつて見たくないが！ 現状は進展しないままになる。仕方なしに視線を下げて見してみる……ぼつてた下頬。

はいいいいいいいいいいいい！　これだけで分かったよ！  
ゆっくりでございまーす！！

あれですか。生まれた瞬間から死亡フラグ満載のダメ生物ですか。  
ああ……終わった。俺の人生はもう死んでも同然。ゆっくりれみりやなんて……死にたい。

でも、ゆっくりだからきつと真っ当な死に方なんてできないんだろっな。

「うっ？　なんだかふらんにてるんだど〜。でもでも、れみりにかわいいこにそだつんだど〜」

どこからそんな考え生まれてくるんだよ……。こちとらブルーな気持ちでいっぱいなんだ。……あれ、こいつなんて言った？　ふらん似だつて？

もう一度、見える範囲ぎりぎりまで頑張って自分を見る。

端にチラチラ、と見えるのは金色の髪……背中に異物感を感じる。髪にそれが当たっているみたいだ。どうも視界に入りきらないから動かせるか試してみる。踏ん張ってみると、髪の毛がこすれた。

見えた、翼。だが、宝石のようなものが付いている。

まあ、ここまで散々な結果だったんだ。何が来たって驚きはしない。……誰だつて解る。ゆっくりふらんだ。

ここまでやって、どうしろと？　俺にどうしろって言うんだ。何、祈ればいいのか？　あの人外面接官？　それともお山の上の神様ズか。

もう、考えるのも嫌なんだが、俺がどうしてふらんなんだ？　親はれみりあ。ふっつはれみりあだと思っただけどなあ。

あの面接官が何かしたか？ それとも突然変異か……。

(ふらんぐらいじやなきや生き残れそうになかった) って作者の声が聞こえた気がするが気にしない。

これは喜ぶべきなのだろうか。れいむやまりさじゃなくて。これは悲しむべきなのだろうか。オリ主最強じゃなくて。

どっちにしるあの人外面接官は天に召されるしかないようだ。もう雲の上の人みたいだが。でも、それじゃあ俺の気が済まない。それこそ一発だけでも殴りたい。手はないが。

「う、う、うあうあれ みり あ う。これからあまあまとってくるんだぞ。あかちゃんはおとなしくまってるんだぞ」

パタパタ、と軽快な音を鳴らしてれみりあは飛んで行ってしまった。全くあれのことは気にしていなかったが、俺の決意はあまあま、もとい食欲に負けてしまったようだ。

だが、忘れることはない。

ゆっくり。それは饅頭。

ゆっくり。それは一応妖怪。

ゆっくり。それは害虫。

ゆっくり。それは史上最弱。

ゆっくり。それは……

説明しよう！ ゆっくりとは幻想卿に突如発生したお饅頭である。

聞いた人は『何いつてんのこいつ？ ばかなの？ しぬの？』と聞いてくるかもしれないが大真面目である。

ところで、みんなは『東方project』ってゲームをしってるかな？ そこに登場するキャラクターがお饅頭になったらみんな買いに行くよね。え？ 行かない？

だけど、そのお饅頭は少々問題があるんだ。 ”動く” んだよお饅頭が。ホラーだねえ。さらにデフォルメされた顔が付いていて喋ったりするんだ。ペットに一匹ほしいね。

え？ 『お饅頭が喋ったりするわけねーだろ』だって？ ノンノン、ここは幻想郷。何でもありだ。

当たり前のようなことを言うけど、生き物には命がある。ゆっくりもその例に漏れず命があるんだ。みんなと同じように生きてるんだよ。

だから、食事もするし、排せつもする。生殖行動もするし、性格まで千差万別。キャラクターの数だけ種類があるのさ。

……でも、人間の中には悪い人間だっているよね。ゆっくりにもそれはいる。総じて”下種”と呼ばれるのさ。”下種”は自分さえ良ければ、それで良しなゆっくりなんだ。

だから自分で餌を集めようとせず、人間の畑に行つて食べ物を奪うんだよ。でも、もし自分のものが奪われるときみすみす逃がすやつはいないだろう？

だから人間はゆっくりを殺す。簡単なことだよね、害虫の命を考える人なんてそういない。

それでも”下種”は”下種”。何度失敗したつてあきらめない。ゆっくりは総じて？。おバカなんだ。妖精よりもね。

だから『誰かをおとりに使えば自分は食べられるんじゃないのだから？』なんて考えだす。善良なゆっくりはおバカだから上手いこと口車に乗せられて手伝わされる。

で、殺されるってわけだ。”下種”のゆっくりもそうさ。餌にた

どり着いたらその場で食べ始めるからね。

結局なかなかうまくいかないものさ。

でも、上手くいくから味をしめるんだよね。ゆっきりの種類には『ぱちゅりー』と呼ばれる個体がいるんだ。

ぱちゅりー種は個体の体が虚弱だが総じて頭がいい。そんなぱちゅりー種が”下種”になったら？ 普段のおバカなゆっきりに慣れている人間はいつもと違う動きをするゆっきりに戸惑うだろう。

そして作物をやられる。

でも、人間は自分より劣っている存在に出しゃばられると気分が悪くなるよね。プライドつてもんさ。

そうやってさらに人間はゆっきりを殺す。

しかし、人間にはゆっきりの判別ができない。その辺一帯のゆっきりを殺しまくる。善良なゆっきりでさえ。ゆっきりも人間の知恵にはかなわないんだね。

『そんなに殺したら絶滅するんじゃないか？』と疑問に思う人もいると思う。でも滅らなないんだ。どこからこんなに出てくるのか。つて思うぐらい殺しても殺してもいなくならない。まるでゴキブリだね。

だいたいのゆっきりの説明はこんなもんかな。簡単に言うとかいゴキブリだね。

「なにやってるんですか？」

「説明だよ」

「誰にですか？」

「読者」

「いいんですか……」

「そんなこと気にしたやつは負けだよ」

天使は疑問に思う。私はこれでいいのかと。どこからか懐かしい  
声が聞こえた。

『これでいいのだ』

天使はどうしようもなくなった。

チートだお。(後書き)

叩く場合は)ry

この小説では体つきのゆっくりれみりやをれみりあ、としています。  
ただ、僕はそれほど詳しくないので間違っている場合もありますので、その場合は指摘して頂けるとありがたいです。

**最強ですよ。**

俺はゆっくりになって初めての食事をするとところだ。だが、今までに俺は人を捨てるかどうするか悩んでいる。

「どうしたんだと〜？ あまあまだと〜。おいしいんだと〜」

ここは幻想郷。甘味といってもたかが知れるし、何しろ親はゆっくりれみりあ。ならその甘味……何かわかるな？

そうだよゆっくりだよ。それもスプラッタ状態のな。

食えんよ。おぞましいよ。よくお兄さん達はゆっくりを虐待できる。

しかし、いつまでも言っていていられることじゃあない。はぁーそのうち慣れるかな。腹も減ったし食うしかねえか。

意を決して、ドロドロ、とした黒い物体を口に含む。

パク、とこんなときにまでコミカルな音が付いてくる。

「む〜しゃ、む〜しゃし、しあわせ〜？」

「うう〜 れみりのあかちゃんかわいいんだと〜」

案外おいしかった。状態を気にしなければ食べられるものだし、何と言ってもこれが主食になってくる。ただ、一つ気になったのは甘い。どうもこればかりは成れるしかないが……。緑茶がほしくなりそうだ。

「う〜。よかったと〜。ままはうれしいんだと〜」

やっぱり、こいつは俺の親か。何とか夢であって欲しい、と願って見たが神様には届かないみたいだった。まあ、ゆっくり中最高の戦闘力を誇るふらんになっただけまだましなのか。

とは言っても、スカウターで測ったらたぶん1もないと思う。

「…………ふ、ふにゃ…………」

考え事、と言うか頭を使うとすぐに眠たくなってきてしまう。お腹もふくれて、段々まぶたが重くなってきてしまう。

考えることは山のようにあるが、今は甘んじてこの状態を受け入れよう。

「…………おやすみ」

「うっ？ おやすみだど〜？ ままもいっしょにねるど〜！」

少し音量を下げてください。

睡眠に負け、弱気になってしまったあの日から、数日が経った。

あの時は睡眠欲に逆らえなかつただけであって、この状態をよしとしたわけではないからな。だが、そんなもんだ。ゆっくりって言うのは、自分の生きたいように生きて、自分のしたいようにして、自分で、自分で、好き勝手にやる。それも楽しいように、ゆっくりできるように。

ゆっくり、と言えば俺もよくゆっくりしている。ゆっくりになっ  
てから日が過ぎるのが早い。ゆっくりしてるからだろうな。それとも単に移動が鈍いからだろうか？

そんな俺はまあまあ成長してきた。だいたい拳分くらいかな。寝る子は育つって奴だろうかね？

俺もなんだかんだ言っつて、れみりあのことが好きになってきたしな。見てたら結構可愛いところあるんだ？

なんて言うのかな……ドジッ子ってやつ？ 流石に塩と砂糖は間違えないが。無いからな。

今は夜。普通なら親れみりやは起きてるんだけど寝ちまった。俺はたまにこうやって夜空を見上げながら昔の事を思い出し、人外面接官に憤怒の意思を燃やす。

そんなときバサバサ、と羽ばたくような音が聞こえる。

ん？ 何か聞こえるな。俺は後ろのほうを見た。親れみりあは寝ている。こいつじゃない。

じゃあ誰だ？

未だにバサバサ、と言う音は途絶えない。そのためか、特に気にせず顔を戻したときに、不覚にも目が合ってしまった。俺はこの時ほど悔やんだことはない。

そこには獲物を見つけた目をする成体のゆっくりふらんがいた。そいつはどんだん降下してくる。やばい。逃げなきゃ……。

同じ個体のはずだが、あいつの目はそんなことを気にした様子なんて無い。

そして、早くしなければ死んでしまう。ふらんはゆっくり最高の戦闘力を持つ。いくら、親れみりあが頑張ったって敵いつこない。

「う……。ままおきて！ ふらんがきたよ……！」

「う……。うるさいんだぞ〜」

ぎゃー！ー！こいつう！ 早く起きろよ。

バサア、と地面に降りた音が後ろからする。とうとう来てしまった。もうこの距離じゃあ逃げられない。

はあ……短い新しい命だったな。もし、あの人外面接官に出会うなら一発殴ってやる。

どうやらあいつはいまだ眠っている親れみりあは後回しにして、俺から先にやるようだ。俺は目を閉じる。次はまともな転生ができるように、と。

B A D E N D ーついてないゆっくりー 完

次回史上最弱にかわって新 r i b o がおくる強力新連載！！

珠玉のスポーツ物語マンをジして登場！！

ワールドカップ日本代表を目指してアンニユイ学園に入学した元<sup>フラ</sup>  
<sup>ンズ</sup> 仏貴族・夢小路サトル！！

だが、入部したサッカー部は実は不良の集まるバトミントン部だった！？ 今年最高の注目作！！！！

オリ主が死亡したため

次週からは新 r i b o による『国立アンニユイ学園』を連載いたします。



最強ですよ。(後書き)

叩く場合は)ry

？ 最強。

「いつけねえ。遅刻だ〜っ！ なんてこつたい！ 転校の初日だというのに〜！」

サッカーボールを蹴りながらパンを食す少年が走りだした。

オレは夢小路サトル（15）

ハプスブルグ家の血を引く生粋の江戸っ子だ！！

オヤジの仕事の都合で今日から国立アンニユイ学園に転校することになったのだが……。初日からこれじゃ先が思いやられるぜ！！

「お待ちなさい夢小路くん！！」

ど〜〜〜ん、と勢いよく現れたのは竹刀を持った少女だ。

「あなたの宿命のライバルにして幼馴染の愛川ユミコよ！ 今日こそはあなたから一本取って私が日本一になる！！」

「ユミコ！ 北海道から追いかけて来たのか！？」

「メン！メン！」

彼女はサトルの問いに対し、竹刀を振ることで答えた。その振りには、誰にも負ける気がないと言う思いが伝わってくる。

サトルとユミコが道路で話し込んでいると、不意にニユッ、と影が伸びた。

「なるほど……キミがサトルくんか！」

「だっ……だれだ！？」

民家の屋根の上にグローブを嵌めた少年がいる。彼もまた自分の強さの証明のためか、シャドーボクシングをしている。

「僕はユミコくんの婚約者フィアンセ的存在相馬ジュン！ 15歳にして世界バンタム級チャンピオンの天才ボクサーさ！！ よくもユミコくんを~~~~~っ！！」

「待って相馬さん！！ 誤解なの！！！！」

いつの間にか屋根から降りて、サトルの横に立っている相馬。だが、サトルにはそんなことを考える暇もなく、誤解により無情にもパンチを放たれてしまった。

「ぬお~~~~っコークスクリユ~~~~ッ！！！！」

「サトルくん！」

ドサ、と相馬のコークスクリユを受け、倒れてしまうサトル。しかし、幸運か不幸か、倒れたときの風圧でユミコのスカートがめくれてしまったのだ。

「はっ……！！ パツ……パ・ン・チ・ラ？」

いつまでたっても痛みは来ない。どういうことだ？ 俺は目を開けてみる。そこには親れみりあがいた。

どういうことだ？ たしか俺はゆっくりふらんに殺されそうになっただんじゃ……。いや、いないんじゃない。見えなかったんだ……。親れみりゃの影に隠れて。そう……ッ！ 親れみりゃは俺の盾に

なっていてくれたのだッ！

「ど、どうして!？」

「ううはやくにげるんだど。いうときかないこはぼいするんだど」

そういつて俺をつかみ投げる。俺は呆然としてなすがままにされていた。

だってそうだろ。普通なられみりあなんて傷めつけられたら『さくや、さくや』と、うるさいはずなんだ。

それが俺なんかを守るために……! いったいどうして!?

ポヨン、と生まれた時みたいにマヌケな音を出して、俺は茂みの向こうに落ちた。多分ふらは、なかなか泣きださない親れみりあにしびれを切らしているだろう。

今戻ったって助からないし、助けられない。

俺は今ほど無力を呪ったことはない。そして俺は跳ね出す。今までロクに動いたためしがないから、途中で転びそうになる。

でも俺は跳ね続ける。親れみりあ……母さんが繋いでくれたこの命。

どれくらいたっただろうか。俺は体中泥だらけだった。気持ち悪い、とは別に思わなかった。この状態が自然であるような気もしたが、見栄えが悪いのはいただけない。

ちようど湖を見つけた。そこで泥を落として、水を飲む。

空を見上げると、月がきれいに輝いていた。

「ありがとう。母さん」

俺はいつものまにか感謝の言葉を口に出していた。少しの間だったが、今の俺の大事な、大事だった親だ。なんにも不思議ではない。そのとき風に乗って言葉が聞こえた気がした。

『どついたしましてなんだど』

俺は空を見上げたままだった。泣こうにも、この体じゃあ泣き方が解らないんだ。

? || 最強。(後書き)

叩く場合はば) r y

## 弱肉強食・最強とは？

「あ……？　ここはどこだったけ？　俺は……」

いつの間にか、寝てしまっていたらしい。

目の前には湖。覗き込んで見ると、映ったのは泥だらけのゆっくりふらん。そのゆっくりふらんは少し動揺しているように見える。そして気付き、こう言った。

「ああ……そうか。そうだったな。俺はゆっくり。そして最弱だ」

口に出して嫌でもあるが、反対にすぐうれしくもある。俺はあのゆっくりの子どもだ。嫌なわけがない。どれほど嬉しいことか。

それでも……ゆっくりの中でも弱肉強食、生存競争がある。俺みたいふらん種やれみや種はれいむやまりさみみたいな種をこのんで食う。

だが俺はそれができるのか？　”俺”という知識があれども、この体は人間の赤子とも変わらないものだ。

もし俺が野生の動物や大人の人間に襲われたら？　子供でも変わらないな。ほかにも他のゆっくりにでも襲われたら？

つまり俺はものすごく危機的状況にあるわけだ。住処もないし食べるものもない。そして親も……いない。

と、なれば俺は自分で生きていかなばならない。つい先日まで都会っ子だった俺が？　無理無理、と言って終わらせられるのなら良いのだが。

人間、環境に慣れやすいともいうが、体が変わり食まで変わって、もう色々と変わりすぎている。しかし、そんな状態でも俺は生きなきゃならない。どんなことをしてでも。泥水を啜ってでも、雑草を

食べてでも。

幸いゆっくりは雑食だ。だから本当に泥水を飲んでも、雑草を食べてでも生きられる。言葉じゃあ表現できないまじいだろうが。

だが、今の状態じゃあとてもじゃないが他のゆっくりを襲えるはずがない。襲えるとして赤ん坊ゆっくり。俺と同じように生まれて間もないころのゆっくりだ。

しかし、赤ゆっくりは居たらどうぞ食べてください、と言っているようなものである。俺みたいな状況だ。

大抵、巢で親ゆっくりに守られているはずだ。つまり詰んだ。

「はあくどうしたらいいのかね。母さん」

『なせばなるんだと〜』

そりゃないんだぜ。

さて、いつまでもここに居るわけにはいかない。そろそろ夜が明けてきたようだ。

一つ幸運なことに、俺はそれほどゆっくりの本能に従わなくてもいいみたいだ。理性があるから本能を抑えられるのかもしれない。

だが、このまま居たらそのうち通常種に殺される可能性もある。とりあえずどこに行こうか。餌がたくさんあるところがいいな。

民家？ ありえない。俺は”ゆっくり”だ。どっかの二次作みたいに村に行けば助かるもんじゃあねえよ。

所詮この世は弱肉強食。強ければ生き、弱ければ死ぬ。どれだけ上手いこつともこの真実だけからは逃れられない。

だがしかし弱肉強食、それはあきらめの言葉ではない。

それはつまり、俺が強ければ強いほど生きることができると言うこと。生きたいのなら強くなりすれば良いだけのこと。

まあ、口だけで言うのはかんたんだ。だけど、やってやらなければあいけないんだ。人間も動物も、どんな生き物だってここぞ、と言うところをなめちゃあいけないだろう？

いや〜びつくりだね。まさかあの状況で生き残るなんてね。普通なら死んでいたのにね。あの時親れみりあが彼を投げた時、普通のゆっくりなら破裂していたかもね。

これも僕が上げた特典のおかげだね。

「それでもゆつくりは無いかと思うんですけど」

何を言うかね。悲しいけど世の中は弱肉強食なんだよ。天使だから忘れてるのかもしれないけど。

「私だって日々毎日戦ってますよ！！ この間のバーゲンだってあのおばさんから、服を勝ち取りましたし」

いや……間違ってもないけど、生死がかかってない気がするよ。彼はもつと今生きるか、しぬかなんだよ？

「何いつてるんですか！ あれほど命をかけないと勝ち残れないものはないですよ。なめてるんですか？」

それは……彼のことをだいぶ否定しているように聞こえるね。しかし……バーゲンと生き物の命が変わりないなんてね……まあいいか。

「ちょっと！ 聞いてるんですか〜！」

はいはい聞いてますよ〜。

……ふう、やっと落ち着いた。彼女は何だかんだ言っつけてしつこいからね。それでも優秀なのは認めるけどさあ。

彼女の話は置いといて、彼の話でもしようか。

今回彼は死ぬか、という運命にあっってしまった。だが、それは残念ながら回避されてしまった。別に悔しくはないんだけどね。

で、僕はこうやって彼の人生を見て楽しんでるんだけど、一言っておく。

僕は、彼の運命を全く弄っていない。

だから、今回死にかけたのは僕が何かしたんじゃないやなくて、あの場所、あの時、あの状態でゆっくりふらんとあっってしまうことは彼の運命だったんだ。

つまり、彼が死のうとも生きようとそれが彼の道なんだよ。

**弱肉強食・最強とは？（後書き）**

叩くなら）r y

## 最弱と最強と最凶。(前書き)

赤ゆの口調がわかりにくいかもしれませんがそういう仕様なんで。

設定とかはwikiから引っ張ってきてますが違つとこもあるものです。

## 最弱と最強と最凶。

ゆっくりしていったね！ 言うとても思ったの？ ばかなの？  
絶賛死に掛け中のゆっくりふらんです。名前はいまだなしです。

”俺”でいいかもしれません。

湖から去ったあとは、跳ねれど跳ねれど木が続いていた。俺はゆっくりだから幻想卿でいいんだよな？ もしかしてとかいは（笑）  
のために都会が用意されているかもしれない。そうなると必然的に人間の量が多いだろうな。

と、無駄なこと考えて空腹を紛らわす俺。道行く先で草や花、虫など食べてきたが全然足りない。

母さんが捕まえてきてくれたゆっくりはおいしかったなあ……と、  
思いながら草をむしゃむしゃ食べている。草を食べるゆっくりふらんなんて珍しすぎる。

もう俺は完璧にゆっくりやってるのかもしれない。うむむ、なんて考え込んでいたらザワザワと茂みが鳴った。

（っ！ 誰か来たのか！）

俺はとっさに鳴った茂みと違うところに隠れる。この体は形状が歪だから気を抜くと羽とかが出てしまう。ゆっくり相手なら問題なさそうだが、人間だったり、もし妖怪だったりすると命はないかもしれない。妖怪によっては助かるかもしれないけど。俺みたいな雑魚妖怪は相手にされないとかでさ。しかし、特にやましいことはないのに隠れるのって変な気持ちだな。

ザワツという音と共に出てきたのは一匹の大きめのゆっくりれいむだった。否、その後からも茂みを鳴らしてたぶんあのゆっくりの

子どもであろうゆっくり達が飛び出してきた。ひーふーみーよーなかなが多いな。

その時俺は重大なことに気がついた。俺は今何体まで数えた？ たしかゆっくりはあまり大きな数字はバカなので数えられないはずだ。俺は色々ゆっくりを超越しているのかもしれない。

じゅる……じゅるり。はっ！ 気付かぬ間によだれが……！

「おかあさんがむしさんをつかまえるからまねてみてね！」

「ゆゆ〜ん」

「ゆっくりしようね〜」

「ちようちよしゃんまってにえ〜」

どうもこのゆっくり達は狩りの練習をしに来たようだ。ゆっくりとて何かしら食べないと生命活動を維持できない。

そのために親から子へと、さまざまな技術を受け継いでいくのだ。……全然聞いていないがな。

実演して覚えさせるのか、親ゆっくりは上から押しつぶすように地面にいた虫を押しつぶした。それを啜えて、あ、食べた。

「むしや〜むしや〜しあわせ〜！ あ、たべちゃったよ。こんどはちゃんとやるよー！」

ゆっくりは意志の弱い生き物である。そのためやるうとしていたことを目先の事にとらわれてしまうことが多い。

しかし、ゆっくり達はこの幻想卿最悪のゆっくりに狙われていることは知らない。真っ赤な目は先ほどの光景もしっかり見ていた。それは得物を狙う、強者のものであった。

結局、親ゆっくりは思い思いに遊ぶ子供たちを見て、ゆっくりしているようだった。

子供のゆっくりの構成は親ゆっくりをまあ、サッカーボールぐらいの大きさとして、2〜3匹の子ゆっくりがバレーボール程度。それより少し小さめの子ゆっくりが2〜3匹。

煙草の箱ほど変わらぬ赤ゆっくりが3〜4匹のなかなかの大所帯だった。れいむ種の他にまりさ種も見られることから、この家族には他に大きいまりさがいると考えられるだろう。

俺は……俺は……もうたまらん！ と、焦って飛びかかると思ったの？

俺だって元人間だ。理性はある。いくら腹が減って死にそうだからと言ってもみすみすチャンス逃すような馬鹿はしない。飛びかかるチャンスは一度つきり。あの赤ゆっくりのうち一匹でもいいし、少し小さめの子ゆっくりでもいい。

一匹になったときこそ勝負である。もし二匹いた場合小さな俺の体では捕食に時間がかかる。その間に逃げられてしまうし、親ゆっくりを呼ばれてしまう可能性もある。

今の状態の俺が体の大きいゆっくりに見つかったら一潰しである。これは俺の一世一代の大勝負ぐらいヤバイ事態なのである。

だが、いくら馬鹿なゆっくりでも一匹で、少し離れた俺のいる茂みに来るわけな、来たああああ……！！……？……？

さつき『ちようちよしゃんまつてにえ〜』と、言っていた赤ゆっくりが俺のすぐ近くまで来た。もう何このラッキーチャンス！ あともう少してこちらの茂みに入ってくる。

ならどうするか？ このまま襲いかかっても親ゆっくりに見つかる視線内に入ってしまう。なかなかやるな。

なんとかして、あの赤ゆっくりの興味をこの茂みの中に移さなきゃならない。ゆっくりは基本新しいことに目が行ってしまう。

つまり俺が親ゆっくりに見つからないようにアクションを起こせばいいわけだ。難しいな。

この場所は少し開けた場所で、周りを茂みで囲むような感じになっているがある程度死角になったりするところもある。上手くいけば親ゆっくりに見つからずとも赤ゆっくりを誘いだせるかもしれない。してどうやっておびき出そうか？ 普通に音を鳴らしたら他のゆっくりまで来るかもしれない。そうなってしまうたら俺の運命THE・END

そのとき目の端にキラキラな宝石が目に入った。

(わーきれーだなー。はっ！ 俺は今何を考えていたんだ……)

危ない考えを頭の隅に追いやり背中についている羽を思い出す。

これを使えば上手くおびき寄せれるんじゃないだろうか？ 相手はまだ小さな子ゆっくり。

きつとれみりやや、ふらんの凶暴性については教えてもらっているだろうが、現物を見たことはないだろう。

そう思い、茂みから赤ゆっくりにちょうど見えるような感じで、羽の先端を出してみる。

チツラチラ、とあまり茂みが揺れないように動かしてみる。音が鳴って、親ゆっくりが警戒してしまったら、どうしようもない。

(おーい気付けえ！ ちようちよばつか追ってんじゃねえよ！)

「ゆっゆー？ きゅらきゅらしちえるんだよー！ これはれいみゆのちゃからもよにするよー！」

なんとか赤ゆっくりは俺の羽に気づいたようで、なにやら勝手なことを言っている。だが、そんなことで、頭に来てはいけない。大体のゆっくりはこっ、だから。

「ゆう〜こによおくにありゆんだにえ〜！ きゅらきゅらしゃんま  
ちえにえ〜！」

カサツ、と小さな音しか鳴らなかった。赤ゆっくりの体が小さかったため、茂みが揺れるのはほんの少しの音だった。

小さな赤ゆっくりは茂みの奥に居たもちもちの者に当たる。そのものが自分の命を刈るものと知らずに……。

「ゆっゆ！？ きゅらきゅらしゃんどこー？ ゆ？ ゆきゅりして  
いつちえね！」

生まれて間もないため口足らずの口から発せられるのは少し発音のおかしいゆっくりしてってね！ だった。

だが、赤ゆっくりが同族だと思ってそのセリフ、挨拶をしたのもかわらずお決まりの返しは帰ってこなかった。家族の者なら絶対返してくれるあのセリフを返してくれなかった同族と思わしき者に不満を覚える赤ゆっくり。

「ゆう！ どうちておへんじしてくりえないによ！ れいみゆはぶ  
んぷんすりゆよー！」

「ああ……勝手にしてくれ」

やっと喋ったと思った相手は期待道理の返しをしてくれずますます不満を募らせる赤ゆっくり。それに何を言っているかもわからないことを言われて心底来ていた。

「おっと、わるいな。ゆっくりにはかんじがわからないんだっとな」

その通りである。ゆっくりは喋ることはできるとも読み書き全般は全然だめなのだ。親程の歳を重ねればひらがな程度なら読めるらしいし、ゆっくり文字というのもあるらしい。

赤ゆっくりはまた意味の分からないことを言われて泣き出しそうになっていた。そこにゆっくりふらんの言葉がせき止める。

「なければいいとおもってるの？ ばかなの？ しぬの？」

そんなことを言われては泣きたくても泣けないではないか、と思うが赤ゆっくりは罵倒に耐えきれず泣き出しそうになる。

が、ふと赤ゆっくりの上に影が差す。何だろうと思つてぐしゃぐしゃの顔を上げると、そこには肌色が広がっていた。

ゆっくりふらは先ほど親れいむのした様に、”全く同じに”再現していた。虫を踏み潰すように。人が歩いていて道端に小さなアリが歩いていようと気にしない、といった感じで。

一つのゆっくりの命の灯火はここで儚く消え去った。

明るい日の光が落ちてきて、そろそろ帰ろうかというところで親れいむは消えた赤ゆっくりを探していた。

「ゆゆくん。みつからないんだよ。どこにいったの？」

親れいむは呼びかけても、数えても（なんとなくで数えているが足りないと分かる）一人足りないことに気が付いてからずっとこの調子だ。

「ママ！ もうきつとさきにかえつたんだよ！」

「しようだよ。はくじょうもによだね。きつとさきにおいちいのたべてりゆんだよ」

「ゆ！ まりさもたべたいんだぜ！ かあさんもうかえるんだぜ！」

子供たちにこんなこと言われては、どうしようもなくなる親れいむ。赤ゆっくりが心配なのだがもうすぐ日も暮れてしまう。

それにこのままだとれみりやなどに、襲われてしまう危険性もある。赤ゆっくりが自分の足で先に帰っていることを祈って、自分達の巢に帰ることとした親れいむだった。

だが、そのような希望はまったくもって叶いつこない。第一生まれて間もない赤ゆっくりが少しといっても巢から離れた場所から帰れるわけがない。

そしてその本人はもうとくに生きてはいないのだから。

親れいむの願いは叶うことなく、ずっと待ち続けるだろう。そして、探しに行けば夜の者達に襲われ、一人一人と、減っていく。

それはまるで一つのほころびで、ダムが決壊してしまうようなものであった。

**最弱と最強と最凶。(後書き)**

叩くなら ( r y

主人公がゆっくりは漢字がわからないと言いましたがめんどくさいので主人公は次から漢字使いまくりです。それでも会話可能という事で。

最強は可愛さと理不尽に負けた。

うめえ！ まじうめえ！ U M A い！ むしゃゝむしゃゝ幸せー！  
おっと、失礼。ゆつくりふらんです。前回、俺の計略によって手  
に入れた赤ゆつくりを食していました。うまいです。これは病み付  
きになります。鬼井山達が熱中するのも分かりますよ。緑茶がほし  
くなっただね。

いやーしかし、よく都会っ子の俺が赤ゆつくりともいえども、ゆ  
つくりを捕まえられたねー！。

なんでだろう？ いやゝなんとというか親れいむの動きを見てたら  
出来たって感じかな。あれかな東方のゝ程度の能力かね。うひょい、  
ゆつくりの俺でもあるのかー！。

そうと決まれば特訓じゃー何の能力が見つけるぜえ！ と、思っ  
たけど食料集めもしないとね。住居も何とかしなきゃならないし。

俺は羽があるから木の上とか安全そうだよな。よし、住居は湖近  
くの木の上で。何でかって？ そりゃあ水辺なんて水飲みに来るゆ  
つくりのたまり場じゃねーか。

ドスって言う大きいゆつくりのリーダーがいるのかは知らないが、  
さっきの家族みたいに巢はバラバラなんだろ。

ゆつくり達が和気あいあいと水を飲んでるすきに上から強襲ッ  
！ うまーって感じですね。

さて、じゃあ決まったし適当に木の実を集めていい木を見つける  
か。

ガサガサ、といきなり草が揺れた。完全に油断していたから、全  
く気配なんて分からなかった。そして、奥から現れたのは黒の服に  
金髪。赤いリボンをつけた少女だった。

「お腹すいた。あなたは食べられる人類？」

「ノーでござんす」

「そーなのかー。じゃあ食べよう」

「ちよつと待てええ！ 俺の話聞いてたのかよお！」

「……あなたは本当にゆつくりなのかー？」

しまったあああ！ ノリと雰囲気で適当に受け答えしてしまったのが間違いだ。考える。考えるんだ。この危機を乗り越えるためにはどうすればいいか。

この灰色の頭脳を使って……肉まんだった。無理だった。

しかし、よく見るとこいつルーミアじゃねえか。うむむ……今からでもだませないものか？

「……うー！ ゆつくりしね！」

「面白いゆつくり見つけたー。リグルに見せに行こうー」

「ちょ、おまつ！ 放せよー!？」

俺は柔らかいルーミアの手につかまりなすすべがない。何とか振りほどこうにも、すでにルーミアは空中に浮いてしまっ、落ちてしまえば死んでしまう。

だが、そんな状況でも言うべきことは言わなければならないのだ。

「うおー！ 放せよ、放せよ、はなせーよ、渋谷区大型デパートハナセヨ！」

例え放してくれる見込みなんて無くても、とりあえず言うておくべきである。抵抗しなければそれだけで、俺にはもつそういう意思がないと見られてしまう。

その状況はまずい。淡々と、なすすべ無く終わってしまう。

だが、その考えで実際にそうなったことはないから、こうなるとは思ってもみなかった。

「じゃあはい」

「えっ？」

俺を掴んでいる手の感覚は無くなり、代わりに浮遊感を感じた。つまるところ、俺は落ちてるのだよ。わかったかね？ ワツカリマセン！

おそらをとんでるみたい！ ってやつさ。

「いやああああああ！！ だ、誰か！ 助けてー！」

このまま俺は、上空から見ると隙間無く生えている木々の中を、この柔肌で通らなければならぬのか？

そんなことになったら、俺の中身はドバドバ、と漏れ出ていってしまう！ しかし、運が良いのかそんな事態には成らず、俺の命は助かったようだ。

「どっちなのかなー。ゆっくりは本当に自分勝手だねー」

俺の降下が止まり下ブくれのほほを持つ、手の感触を感じた。上からルーミアの心ともないゆっくりに対して罪悪感は一切ありませんという言葉が響く。

……ルーミアに罪悪感ってあるのだろうか。ザ・ロック効くの？

「いや、さすがに酷いと思うんだけど」

「ゆっくりだし、いいんじゃないかー」

ぐはっ、これがドキツイ。この『ゆっくりだから』って言う言葉や類似したようなもの。

そうなんだよ。ゆっくりって生き物は社会的にも野生的にも何から置いても一番下にいるんだよな。俺達がいくら訴えても権力の低いゴミみたいな存在だからな。というかほとんどの奴なんて金儲けの道具か、ゴミか、暇つぶしにしか見てないだろう。

なにせ潰しても潰しても無駄に居る。農家から見たら害虫と変わりないんだよな。

「ん。着いたよー」

どうやら俺がゆっくりの地位の低さに嘆いていたら彼女の友人の家に着いたようだ。食われるのだろうか。いやだな。

もっと長生きしていたかった。せつかく決意したばかりなのに。こんなんで映姫様に会うなんて嫌だ。

「リグルーいるかー？」

数秒ほど待つて……ガチャ、という音と共に扉が開き、中から緑髪の少女が出てきた。ただ、頭に触覚のようなものがあり、人間ではないのが一目瞭然である。

その点、ルーミアは解りづらいんだな。

「どうしたのルーミアってなに、ゆっくり？」

「おもしろいゆっくり見つけたー」

リグルーが見たのはルーミアに抱えられガチガチになっているゆっくりふらんだった。

その時の俺の魂は口から半分出ていたのかもしれない。



**最強は可愛さと理不尽に負けた。(後書き)**

叩 ( r y

本名は秘密！ なぜならその方がかっこいいから！（前書き）

書いてあったのを適当に直して、出しとく。

あっちでは更新できそうにないと言いましたが、こっちはオリスト  
ーリーなんで脳内で書けるんでまあ割とイケました。

本名は秘密！ なぜならその方がかつこいいから！

くちゅ、くちゅ……と、含みのあるような音が聞こえてくる。

さて皆様何やらみだらな音が聞こえますね？ これは決してルーミアとリグルがねちヨってるわけではございません。

「何いつてるのさ……」

「おお、うまいぞおおー！」

簡単に言いますと、俺の体にルーミアが手を突っ込んで食してるんです（エロくない……エロくない……）

どうしてこうなったかと言つと……あん！ 駄目……そ、そこは！ ひう……あん……あ、う。

「ちょ、ルーミア食べすぎだよ！ なんか目とかうつろだし……」

「ん〜おいし〜リグルも食べてみなよ！ ほら！」

リグルの目の前にふらんの体から削り取られた肉塊、正しくは餡肉まんのである。それが顔の前に来る。とくに湯気とかが出ているわけではないのものすごくおいしそう匂いがする。

リグルの理性は崩壊寸前だった。

「ん？ 食べないの？ なら私が食べちゃうよ！」

「いただきます」

リグルの理性は押し倒された！ その速さは言つまでもないだろう。

ふらん食べられEND

「ふう、やれやれだぜ。嬢ちゃんら、きっちりおとしまえつけてくれるんか？」

俺の前には正座させられたリグルとルーミアがいる。外では太陽が暑苦しいぐらいに光ってやがる。

二人に食われ、本気で生死の境をさまよい、うっうー言ってる母さんに出会ってしまふようなヤバさだった。

そんな俺はリグルの理性が戻り、あわててオレンジジュースかけられたり、小麦粉を溶かしたのをぶっかけられて、何とか一命を取り留めた。

実は俺達ゆっくりはオレンジジュースをかけたたり、小麦粉を溶かしたのを塗りつけると、何故だか治ってしまうのだ！

まあお饅頭だし、そんな感じでゆっくりはメルヘン度が高いのだ。さて本題に戻る。こいつらが俺を食ったことだ。ぶっっちゃけ許してるんだけどね。だって妖怪って食う側だろ。

だから怒る理由はないんだよ。……まあケチ付けて何かしてもらっただけ。

「いや、ね？ 私も悪いと思ってたよ？ でもルーミア止められなかったの私だし……だからさゆ「許す！」え、ほんとや「ただし」え？」

ただで許してなるものか。力の弱い俺は頭で上っていくしかないんだぜ。餡だけ。

「なに、難しいことじゃない。ただ、俺が困った時に助けてくれな  
いか？」

「そんなことなの？ いいけど別に。ルーミアもいいよね」

「いいぞー。だが、中身よこせー」

寒気がした。しかし、ここで負けては駄目だぞ俺。頑張れ俺。

「よし、その言葉忘れんなよ。じゃ、俺行くわ」

フッフ、こうやって適当な恩着せてどんどんと昇りあがっていく  
ぜ！

リグルはなんだか呆けた顔してやがる。きっとこの程度で済んだ  
ことに驚いてるんだろう。

「待って！ ……あんたは本当にゆっくりなの？」

あー答えにくいことを……何と答えようか？ 実はドツペルゲン  
ガーの出来そこないとか、ゆっくり研究所でゆっくり線が見つかつ  
て発明された超高性能ゆっくりだとか。

どれも突拍子すぎる。まーこんなんでいいだろ。

「普通のゆっくりふらんだ」

俺はかっこつけたのだが、扉が開けられなくて四苦八苦していると  
ころをリグルに開けてもらい、なんとも言えない空気でリグル家を  
後にしたのだった。

あのゆっくりは一体何だったのだろうか。昨日、ルーミアがいきなり連れてきて、よく喋る頭のいいゆっくりだった。

ただ、あまりにも頭がよすぎる。大きさから見て、子ゆっくり程度。それなのに人間の大人並みはある。いくら賢い、と言っても限度があるだろう。それにはちゆりー種ではなくふらん種ときた。

もう意味が分からない。

でも、……中身はおいしかったなあ。また食べたいな。はっ！  
いけないいけない、今はあのゆっくりを調べるべきよ。

でも、私じゃあ全然分からないし……もうあの薬師に見てもらおうべきか……いやいや、そんなことしたらあのゆっくりに研究と称した解剖ショーをしだすだろう。

私はまたあいつと会う約束をしているんだ……べ、別にまた中身が食べたいなんて思っていないんだからね！

やっぱり私だけじゃわからないな。ルーミアにも相談してみよう。  
ルーミア、ルーミア、あれ何処？

さっきまでは居たはずなのに……一体どこへ行ったんだろう？  
そういえば、あのゆっくりふらんを見送ったときにはもう居なかったような……。

さてここはどこかの森の中。昼間なら太陽の光が入ってくる程度の森だ。

どこかで、『ゆっくりしててね』と言う声も聞こえてくるぐらい平穏である。そんな平穏な森にくらい影が差した。具体的に言うとうと黒い球体的なものである。ルーミアである。

「何しについてきた？」

「くう。おまえつまい。かゆうま」

おいおい俺の中身はなんかのウィルスか？

ルーミアの手がゆっくり伸びてくる。

「はっ！ 捕まってたま……ぐぎゅう！？」

簡単にルーミアの小さい手で顔を掴まれた。そのせいでザブングル並みに顔が悪くなってる。

「いったただっきますー」

「むぎゅうふうふう（待つんだ！ 話せば分かる。このまま食われENDは嫌だ！）」

ルーミアは俺を持ち上げ足のあるところ。（いつも地面に付いてるところ）を、その小さい口をめいっぱい広げ噛みついた。

「むぐううううう！？」

「まいっー」

やめる、中身が出る。中身が出るウウー！！ 中身が出ちゃうよお

おおー！！

どう考えたって俺の中身には依存性があるとしたか思えない。ルーミアは何か食ってるイメージあるけどさ、俺ばっか食う必要ないだ

る？ だって、他に食べるものなんてたくさんあるだろうに。それこそ、俺みたいな小さいものじゃあなくて、そう人間。あれの方が食べ応えがあるだろう。

それなのにわざわざ俺を食べる理由は……小麦粉をかければ復活するからか。

「近い、旨い、ただ」

な、なんてこつたい……それだけそろってりゃ仕方ねえ……！

「うんうん。分かってくれてなによりだよー」

「バカメ！ 分かってしまえばこちらの物よ。今から俺を食うには一つ条件があるぜ！」

「な、なんだってー！？ おいしいものには常に犠牲が尽くんだね……」

「戦い方を教えてくれ」

「えっ？」

どうもルーミアは、俺が何を言っているのか本当に理解できないうって顔をしている。なら、もう一回行ってやるだけだ。

「俺に戦い方を教えてくれ」

「嫌。忘れたのゆっくりふらん……私はルーミア、ノーとしか言わない妖怪よ」

なんで！？ こんな格安でごーごーいちの豚饅並みに上手いんだぜ？ お手軽だと思わないのか。こうなったら君の心変わりを誘発しよう。

俺の肉まんの脳を見せてやるぜ。

「手伝ってくれたらいつでも食わせてやる」  
「……イエス！」

ノー、としか言わないはず……しかもすぐかんたんに釣れた。そんな弱い意志じゃあ、ゆっくりと変わらないんじゃないか。まあいいこれで師匠を手に入れたぜ。多分これで生き残れる可能性が出てくるはず。じゃあ、さっそく弾幕のうちかたとか教えてくれよ。

「その前に食べさせるー」

その食べる量は一体いくらなんだよ……無理すぎる……。さっきは勢いで言っちゃったが……そうだ！ こっぴつならこっぴつするぜ。

「ルーミアちょっと待っててくれるか？」

「いやー。今食べたい。すぐ食べたい。骨まで食べたい」

骨は無いぜ……。

だが、何としてでもこの場を乗りきらなきゃあ、いけないんだ。そのためには一時の恥なんてザラじゃあねえ。

「あなたに食べられるなら……綺麗な状態で食べてほしいの。だから湖で汚れを落として来たいの……いい？」

よくもまあ、俺自身こんな言葉が出て来るなんてびっくりだ。だが、背に腹は代えられまい。

「むう……そういうことなら仕方ないなー」

ルーミアは了承してくれたようだ。これでどうにかは、成るだろ

う。俺は元人間。頭の使いようをなめるんじゃないやねえぜ！

この前の湖に向けて跳ね出す。この時間帯なら……居るはずっ！  
そう、俺の身変わりが！ 簡単に食われてなるものかーッ！

本名は秘密！ なぜならその方がかっこいいから！（後書き）

それでも忙しいのは変わらない

そんなことよりもいじやんと入りたい。(前書き)

おうどん

そんなことよりおつとんだべたい。

ポヨンポヨン、と草の生えた地面を跳ねるメルヘンな音が鳴る。パサ、と草が体に当たり、小さな音を出す。相手が普通の野生動物ならこの程度で逃げだしている者もいるだろう。しかし、相手はバカ。？ではない。それよりひどい生き物だ。

俺の視線の先には湖で水を飲むゆつくりの家族。れいむ種とまりさ種の家族だ。皆、襲われるわけないと云った顔で意気揚々とゆつくりしている。うぜえ。

ま、この程度余裕だぜ。俺の戦闘力をなめるなよ。俺は死の淵から生き返るたびに強くなるんだぜ！  
(そんな設定ない)

ザザ、と勢いよく飛び出し草が揺れる。だが、それでも気付かないバカども。

もう少して届く、と言うところで親まりさが俺の存在に気付いた。始めはなんでいるの？ みたいな顔をしていたがだんだん現状を把握して、顔面蒼白になっていた。口を開け俺の名を叫ぼうとする。俺の名を言ってみろ！

だが、言わせてやりたいが生憎俺も命がかかっている。

「ふ、ふら」「ゆつくりしていつてね！」

「ゆつくりしていつてね！」「」

顔面蒼白だった親まりさや他のゆつくり達は一切の行動を中断し、ゆつくりしていつてね、を言った。ゆつくりは『ゆつくりしていつてね』と、言われると反射的に返してしまうのだ。

この隙に硬直していた小まりさいだきい！

俺は硬直していた中から、一番近かった小まりさを口で啜えて反

転し、脱兎のごとく逃げ出す。体の柔らかさを利用し、着地の時の帰ってくるエネルギーを次の跳ねに回す。

「ゆゆくん!? まりさのこともが!」

「れいぶのおちびちゃん」がえ「ぜえええ!」

おお、れいむの方は俺がまだ小さなふらんだと思って鬼の形相で追いかけてきたぜ。大きさが違うから見見るうちに追いつかれる。

俺の渾身の逃げに追いつくとは……、なかなかやるじゃないか。

れいむは好機と見たか全体重をかけて体当たりを仕掛けてくる。

小まりさを啜えている俺ではかわしきれない。

そのまま俺はれいむに乗っかられた。重てえ。

「ゆつゆつゆさつさとおちびちゃんをかえすんだね。ざこのくせにでしゃばるのがいけないんだよ」

れいむはふらん種を倒せたことがよっぽど嬉しいらしい。だが、いかせん頭は悪かった。

「おちびちゃん! できていいんだよ! ばかだまぬけなふらんはおかあさんがたおしたよ!」

だが、いつまで経っても子ゆつくりの元気な声は帰ってこない。

怪訝に思った親ゆつくりはきつとこの俺が隠していると思ったのだろつ。

「さつさとおちびちゃんをかえすんだよ! まけいぬはまけいぬらしくしてるのがいいんだよ!」

「バカかお前。そいつはもう死んでるんだよ」

「ゆ? なにいつてるの? ばかなの?」

やれやれ、だからお馬鹿さんは駄目なんだよ。

考えてみるよ。俺は小まりさを口に啜えて跳ねている。それを後ろから体当たりしかけたら俺はどうなる？ 簡単だ、前のめりに倒れる。

そうなると口にくわえていた小まりさは？ 必然、圧死。ほら、見えるだろ？ 俺の前に広がる扇状のあんこがよお！

お前が殺したんだ。あゝあ、小まりさはなんて可哀そうなんだろうな。信じていたおかあさん（爆笑）にころされてさ。

「ゆ？ なにをいつてるのかわからないよ？ れいむはかちぐみなんだからさっさということをきいてね！」

あー、駄目だ。このお馬鹿さんは自分が子ゆつくりを殺したことに気付いていない。

こういうバカにはさっさと現実を見せつけるのが手っ取り早い。それを見せるには俺がこの位置から退いて、小まりさの帽子などの飾りを見せつければいいのだ。

ゆつくり達は同じような顔がいくつもいる。もちろん馬鹿だから覚えられるはずないのだがきちんと識別できている。

それはなぜか？

それはゆつくり達が身につけている物 帽子や飾りだ。れいむならリボンやもみ上げの飾り。まりさなら帽子。

もちろん俺もナイトキャップ？ みたいな帽子で他のゆつくりからは識別されている。

して、この識別判断に大事な帽子などはかなり重要で、本気で帽子や飾りで見わけを付けている。

例えばまりさとれいむが居る。その二人はもちろん固有のお飾りを付けている。

もし、その飾りをまりさとれいむ、反対につけてしまったら？

回答、認識が変わる。

他のゆっくり達はまりさをれいむと認識し、れいむをまりさと認識する。早い話がお飾りあれば変装可、死体の識別可、などありえねえ事になる。

だから、本体がぐつちやぐちやになろうとも帽子を見せさえすればどんな鈍感野郎でも一発で気付くわけだ。

で、これほど帽子や飾りが大事なのは分かったと思う。でも、その帽子や飾りは消耗するんだよ。ゆっくりの肌　小麦粉でできてるらしいが。

消耗したら無くなる。無くなるとどうなるか？　お帽子ない可笑しな子扱いされる。

邪険に扱われたり、集団で暴行されたり、屑の烙印を押される。だから、中には帽子を奪おうとする奴らもいるんだ。大抵は失敗に終わるが、もし成功すると　入れ替わられる。おお、怖い怖い。

これでどれだけ帽子が大切か分かったと思われる。

じゃあ、これから親れいむに小まりさの『あんこ付き帽子』を見せようか。

てめー親れいむに押し掛かれてるじゃねえか！　という声もあるだろうが俺は仮にもゆっくりの中で『最強』だけ？

『最強』に！　簡単に勝てると思うなよ！

「ゆゆ？　まけいぬはれいむにふまれるためにうまれてきたんだから、じっとしててね！　あと、あまあまちょうだいね！」

「だらああああアアー！」



ここまできたら分かってしまった。こいつは駄目ゲスなんだなって。確実に視界に入っている帽子には目もくれず、小汚いもの程度にしか思っていないのだろう。

そして、この食べ物を家族のもとへ持っていけない辺りは、……多分だれしもが取る行為だと思つう。

人間だつて目の前においしいものがあれば独り占めしたくなるだろ？ それといつしよだ。ゆっくりの場合、旨そうなものがある。食べよう。みたいな感じだけどさ。

俺も小まりさを啜すすっていたから、潰れた時に中身が口の中に入ってきたんだけど、これがうまいのなんのつてわけよ。

目も前でバクバク食べてるれいむの事も分らないんだけど、こいつはうぜえ。そろそろこいつに現実を見せるべきだわ。

「れいぶさん、れいぶさんや」

俺の罵倒に反応してか、顔をあげるれいむ。

「ゆ！ れいむはれいぶじゃないよ！ れいむはれいむだよ！」

相変わらずである。俺は帽子を口に啜すすえ、れいむに見せつける。

「これ、何か分かるか？」

「ゆ？ きたないおぼつしなんかみせないでね。しょくじちゅうだよー」

全く、頭が痛い。いちいち説明しなければ、ならないなんてな。

「こいつはあんたの子の帽子だ。見おぼえないか？ ほら、この辺

りのしわとかそれっぽく……」

「ゆ？ …… ゆゆゆ！？ ゆげえええ ……」

れいむが口から餡子を吐いた。どうやら帽子を認識して、食べたものが子供のあんこであることが分かったらしい。

さて、れいむの動きも鈍ったし食つか。餡子を吐いて動けないれいむ近づき、歯を立て噛みつく。

チュウ、と吸血鬼が血を吸うような感じで中のあんこを吸い取る。

ふらんなんだからこれぐらいできて当たり前だ。

数十秒も吸っていると、皮だけになってしまっていた。

「も……ゆ……がっ た」

親れいむは最後に言葉にならない声を上げて、息絶えた。

さて、れいむを食べてお腹いっぱいになったし、これをルーミアに持っていくとするか。わざわざこんなところに来たのは、俺の食事、兼身代わりを探し出すためだったのだ。

だが、……うまくいくのだろうか？

案の定、俺が食べられました。

ゆっくりしてるとくびがとれるぜ。

「じゃあさ、結局俺を食べたんだし弾幕のうちかたを教えてくださいよ」  
「まあまあ、そうせかささないですよ。弾幕を撃つなんて簡単なんだし急ぐ話じゃないんでしょ？」

そう言いルーミアは俺の体の端っこをつまみ、そのままピーナッツや柿の種を食べる様に上に放り投げ器用にそのまま口に入れてしまった。

「食べるなよ！ 盗み食いやお菓子をちよつとつまむような感覚で食べるんじゃないよ！ それに急ぐ話って言うなら俺の生存確率的に急いでほしいよオ！」  
「ふう……しかたないね。そんなに言うなら忙しい人向けの教え方にしてあげようかなー」

なんだか危ない話かもしれないが、のんびりしてたら全面的に俺の命がやばい。どれくらいやばいかっていうと、もう例えができないくらいにやばい。

ある意味ルーミアというほうが、あぶないんじゃないんだろうか。

ルーミアが俺を食べる手を止めて右手をそこら辺に生えている木に向けた。

「じゃあ見ててね。一度つきりつてやつだよー。しっかり見ないと置いてかれちゃうよー？」

そう言ったルーミアは木に向けた手から黄色い弾幕を出した。そ

の弾幕は直線的に進み、木に当たって消滅した。

きつと手加減してあったのだろう。個人的な見解だが弾幕ってのは、服がボロボロになるくらいだからもう少し威力がありそうだと思う。

「って冷静に分析してたけど、お前さつき何て言った!? 一度つきりだつて! 一子相伝の秘奥義とかじゃないんだから、もっと手とり足とり教えてくれよ!」

「えーだつて急ぎの話なんでしょ? ふふ……じゃーのんびり手とり足とり教えられないよねー。一発見せてそれで覚えたら楽でしょー」

「そんな見ただけで覚えられる写 眼的なのねーよ! …… 本当に一発だけなのか?」

「ホントのホントに一発だけだよー。人間やれる時にはやれるらしいんだし、ゆつくりもできるんじゃない?」

「全能力的に無理があるつてもんだよ……あれだろ、普通体に流れている魔力的なのを感じる、って流れから入るもんだろ。全工程ぶっ飛ばしますか。見てやれ、ですか。いつの覚えさせ方ですかつて、話だつてんだよオ!」

「やれやれ、仕方ないね。もう一回見せてあげるからこれで最後だよ? 適当にまねればできるよ。夜符『ナイトバード』」

ルーミアの手元から数々の弾幕が現れ、薙ぎはらうように進んでいく。

青、水色の弾幕が重なる。

最後と言われたから目玉が飛び出そうになるぐらいルーミアを凝視する。あ、ちよつと目玉が出そう……。

ただ後ろから見ている俺だが、本当にきれいだと思う。俺にもこれぐらいきれいな弾幕が撃てるのだろうか。

ルーミアの弾幕は辺りに生えている様々に木に当たり、ほのかに

魔力の残滓を残して消えていった。

「どう？ キチンと見せてあげたからできるよねー。ふふ……さあ！ やってみせて！」

ルーミアは薄く笑いながら俺にそう言った。その笑い方は俺がでないというのが分かっていながらも、やらすという意地の悪い笑みだ。

俺は体の大部分を占める大きな口を器用に使い、ばれないように小さくため息をついた。

正直、あの弾幕はきれいだと思った。俺にもできないものかと思つた。しかし、手本を二回見せるだけでは、あれほどの事を出来るわけがない。

……、ルーミアの方を見るが、ニヤニヤと笑っている。仕方ない、考えられる限りの放つ、という行為に俺的アレンジを加えようか。

まず、ルーミアは手のひらから撃っていた。そういう、放出するところをつくと楽なのだろうか？ と、なると俺も手を使えばイメージがしやすい。

しかし、俺は手がない。どうやって撃つか……なら、今の俺でもイメージしやすいところを使えばいい。

それは口だ。丸いゆっくりの体で使えそうな所はここぐらいだろう。間違えたら口の中が焼けてしまいそうだが、口から光線を撃つような技はよくある。

贅沢を言えば、羽の宝石部分から出せれば文句はなかった。オーレンジ攻撃ってかっこよくないか。

「俺もできる。俺もできる。俺もできる。俺もできる……はず！」

スペルカードみたいに数の多いのは撃ちようがないから、まず最初は一発。

さっきルーミアが撃っていたような感じで。

でも、魔力とかは一切分からない。……こういつのはひねり出すものだよな？

こう……フンッ！って感じかな。

やってみるか。目標は五メートルぐらい先の大きな木。

口を開けて捻り出すような感じで撃つ。

最初ルーミアが撃ったような感じでただまねてみる。

俺はできる。俺はできる。俺はできる。

体は砲身。体は手のひら。

何かがこみ上げてくる。

奥から何かが来る。これは魔力……？

今、撃とうと思えば撃てるかもしれない。

ニヤニヤ、笑っているルーミアを驚かせてやろう。

「見てろよルーミア。これが俺の弾幕だあ！」

俺は口を開けたまま器用にしゃべり、弾幕を吐きだした！

……

「おええっ……うぶげえ、うええくく……げえ。ぺっぺ」

「ア、ア、アハハハハハハッ！吐いた！ふらんの弾幕はげろなんだね！あはは、汚い汚い。あはははははは！」

こみ上げてきたものをそのままはいたら、げろだった。げろ、と言うか正確には俺の中身である。

うえ、口の中にまだ餡が残っている。

いや、餡だからおいしいんだけど、自分の中身って生理的に無理でしょ。

「ふん、さっきのは無しだ無し。次は首が取れちまうぐらいにびっくりさせてやんよ!」

「ふーんふーん。すごいなー、すごいなー。思わずリゲルやチルノに突発的に話がしたくなるような面白おかしいふらんになにができるのー?」

もう、隠す必要な無いと張りにゲラゲラ笑い転がるルーミア。

畜生、見てろよ。今度こそ絶対に成功させてやるんだからな!

だから、ちねるように俺の体を食べないでくれ。

……

思い浮かべるはルーミアのスペルカード。

こちらの方が鮮明に覚えている。綺麗だった。美しかった。

俺のあんな弾幕が撃ちたい。まずはまねてみよう。それすらできないければ阿呆らしい。

薙ぎはらうように段々と繰り出されていった弾幕。青と水色が折り重なり、俺が面前にしたらとてもじゃかわせないであろう弾幕。

思い浮かぶのは青と水色。薙ぎはらうように、広範囲に当たるような感じ。

弾幕を撃てるのか、すら危うい俺が頭の中で一生懸命に組み立てる。パクリだの、盗まれただの、と言われてもいい。それほど上手く作れたのだから。

ルーミアをまねする。似通っている部分は全くないが、まねをする。

そして、俺はできる。俺はできる。俺は

体に異常はない。むしろルーミアに食べられたことを気にする。

口をあける。ここは砲身。弾幕が出るところ。ルーミアの手。

何かがまたこみ上げてくる。これはさっきとは違う。

木に真つすぐ狙いを定めて

口が少し焼けたように熱い。

ルーミアがあっ、と声をあげる。

俺が見たのは右に、左に、右に、と飛んでいく青と、水色だった。綺麗で美しい、がどこか品に欠ける。劣化したような感じがする。青と水色は木々に当たり、残滓すら残さず消え去ってしまった。口が少し焼けたように熱い。

できた。俺はできた。

俺は少し痛む口を閉じ、すぐに反転して、ルーミアを見た。

だが、俺が口を閉じる前に、ルーミアがあつ、と言った後すぐに聞こえたポロツ、と言う音に気が付いていればこんなことにはならなかったのかもしれない。

そこには ……

首の取れた××××（ルーミア）が居た。

綺麗にとれていた。首はただの暗い穴に見えた。

血、らしき液体は流れていない。

体はうつ伏せになっていて、顔は地面に付いてしまっている。

これは？一体どうして。どうしたらこんな。

俺はとりあえず元に戻そうとした。このまま放っておくのも忍びない。

××××（ルーミア）の顔は見ないように、掬いあげるように下あごを動かし啜える。

そのまま飲み込まないように体の首のところまで運んでいく。

首はまるでよく切れる何かで切ったような感じだった。

もしかしたら、すぐに付けたら治るかもしれない。妖怪だもの。俺もそうだから、きつと治る。

切断されているような場所は、地面につけないようにゆっくりと下ろす。

体を使っでずれがないように押したり、引いたりする。

……

「……、ずれていない。誰がどう見ても一度とれたなんて分からない

い。誰も信じるわけがない。だから俺も信じない」

ぴったりとくつついた。当り前だ、元からそこにあっただのだから。

これで、きつと治るはず。

大丈夫、理不尽な俺が居るのだからこの世界がもつと理不尽でも構わないはず。

(そんな理不尽が許されるのなら、××××(ルーミア)がいきなり×(死)んでしまうような理不尽があっても文句はいえないんじゃないのか?)

一瞬、馬鹿な考えがよぎったがすぐに頭の隅に押し込めた。

俺はただ、待ち続けた。これできつと治ると信じて。

なにあげのあんこですか。(前書き)

や！久しぶり。

この作品がまさかのレビューされたよ！ 蠱毒成長中さんどうもありがとうです。

いや〜正直ネタで書いてたのにいつの間にかこんな受け取り方されたんだろっね。  
まあいつか。

さて、今回は作者、全国のルーミアファンにけんか売ります。作者死にます。

なにあじのあんこですか。

あれからどれほど時間がたったのだろうか。

あれからと言つのは、××××(ルーミア)の首がきれいにとれてしまった時からである。

俺は正直、もう気が狂っていても可笑しくないはずなのである。だって、目の前で人間とも変わらない、どこが人間と違うのか教えてほしい位の女の子の首が取れてしまったのだ。

俺はもうきつと、ゆっくりであってゆっくりではないんだろう。俺は最初、浮ついていた。驚いていた。やるせない怒りも少なくともあった。

その怒りは、俺をわざわざゆっくりなどに転生させた神である。せめて、せめて、あかなめでもいいから、と思ったこともあった。でも、きつとゆっくりじゃなかったらルーミアやリグルに会えなかったし、母さんにも会えなかった。

でも、ゆっくりじゃなかったら××××(ルーミア)の首は取れなかった。

俺は一体どうしたらいいのだろう。俺が死ねば××××(ルーミア)は元に戻るの？

結局俺は、自問自答を繰り返して、誰かが答えてくれることに期待して、でも草が揺れて物音がするのに異常に反応して、結局何もできなかつた。

あれからどれくらい時間がたったのだろうか。

あれからというのは……また同じことを考えていた。さつきから俺は何回繰り返し返しているんだ？ ただ、ずっと××××（ルーミア）だったものを見て、考えて、繰り返し返して。でも、何回考えてもどうしようもなかった。

無力な俺には何をすることもできない。出来ることはごく僅か。だから、出来ることをやり続ける。

××××（ルーミア）だったものが他の誰かに食べられないようにするために。

あつ、よく考えたらゆっくりの俺って使えるな。××××（ルーミア）が食べられそうでも俺が代わりに食べられたらいいんだし。でも、俺だけで満足しなかったらどうしようか。いっそフランドールみたいにフォーオブ・アカインドでもしてみようか。弾幕が見よう見まねでできたんだし、俺も一応ふらんだから。

俺がそう思っていたところだった。

ふと、首が揺れたような気がしたのだ。首が取れないように、自分の体を使って押しつけているような状態なんだが、はっきりと見たわけじゃない。

ただ、少し動いたような気がするのだ。不思議に思っていると、



か心配したんだぜ。ホントによ……。

「む、何その『あなたのことと思ってましたよ』的な顔は。その下膨れと相まって余計に腹が立つちゃうんだけどー？ 食べちゃうよ？」

「ああ、いくらでも食べてくれてもいいぜ。おまえのためなら死ぬ覚悟してたからな。今ならいくらでも食べてくれてもいいぜ」

「な……！？ チョ、ちよっと何言ってるのかー！？ ややややっぱり食べ過ぎちゃったのかー！？」

む、こういうときに限って遠慮するなよな。俺がいつて言うのはまねなんだぜ。まったくよお。

でも、こっただけ元気なら安心だよな……。ちよっと眠たいな。ずっと見てたからな。

少し寝るわ。

「ええっー！？ き、聞いてるのかー！？ あれれれ、よく見ると下膨れの部分が無くてやせ細ってる気がー！」

ああ、おなか減った。コッペパンでも要求したろうか。

それと静かにしてくれよ、こっちは自分勝手に悩んだ自分勝手なんだからさ。眠いんだ……。寝るときも自分勝手ってね。

私は妖怪、と言われている。どういったものなのかは知らないが、恐れられるものらしい。それなら子の外見はあってないんじゃないかなのかー。ちなみにそれは妖怪全般に言えることでもある。

だが、私の膝で眠りこけている妖怪は腕で簡単に包み込めて、力も弱くて、ついでにとある妖精に引けを取らないぐらいの大馬鹿だったりする。

そんな妖怪である彼、彼と言ってもたしかゆっくりは半陰陽だった気がする。でも、たまに『俺まりさ』なる者を見るとときがあるし、彼が自分自身を俺と言っている。それならそれでいいだろう。

話がそれてしまったが、妖怪は人に恐れられる為に存在している。なら、恐れられないし怖がられもしない彼は、一体何のために存在しているのだろうか？

それは……私はたぶん分かっている。でも、それは彼が見つけることで、私がいちいちと言うことじゃないの。

それにしても、簡単に死んでしまいそうな 陽炎みたいだ。彼はゆっくり特有の下膨れが無くなって、すっきりしすぎてしまっている。そんな弱い存在なのに、私を？

……そ、そんなことあるわけ無いなー！？ たかがゆっくり、一時の心の動きに惑わされては！？

……落ち着こう。

私は彼がイビツにも、不格好すぎるけど、夜符『ナイトバード』を再現するところを見ていた。内包する魔力は少なすぎて、弾幕と言うには程度が低すぎだった。

ただ、それからの記憶は全くない。私がどんな状態になっていたのかも分からないし、彼がどんな状態だったのかも分からない。

だが、一つだけいえることはある。彼は彼自身のためと、私のためにがんばってくれたのだ。……ふう、全くこんなゆっくり見つかるんじゃないよ。

でも……今はこの寝顔を独り占めー。

朝、目覚めるとき誰だつて布団のぬくもりは放したくはない。

俺もそうだった。ただ、最近は布団という環境で眠ることはできなくなっていた。この世界に生まれ落ちてからはずっとそんな感じだった。いつまでも寝ていればそれが死につながってしまうからだ。だから、安物の布団みたいな固い地面じゃなくて、ソフトタイプの乗り込んだらへこんでしまうような柔らかさを持つ布団みたいな場所で寝るのは久しぶりだった。

何というか、体で言う腰のあたりの疲れがとれていく感じがする。

しかし、どういうわけだろうか。いつもなら柔らかさと、カモフラージュ効果を同時に持つ落ち葉を使って、夜を越していたはずなのだが、今日はいつもより違う。段違いだ。

まあ、俺はよほどリラックスしていたのか、いつもと違う状況に戸惑いもロクにせず、目をつつすらと開いた。

そこにはこちらの顔をのぞき込むようにして俺を見ているようだったルーミアの顔があった。

「あわわ！？ 起きてたのかー！？」

その瞬間、俺はきれいな放物線を書きながら回転し、なにか柔ら

かいモノに当たって地面に着地した。

して、ルーミアの行為には俺が怒ってもいけないことが全く持って含まれていないので、ちょっといきなり投げることにについて小一時間問い詰めようか？

「どうして俺がルーミアに捕まれていたのかはまあ、分かる」

「それは絶対に分かっていない顔だなー！ どうせいつもの事って感じの顔をしないでほしいよー！」

どうせおながが減っているところで丁度よく何故か、寝ていた俺がいたからおやつ感覚で食べようとしたんだろう。

ああ、皆まで言うな分かってるよ。

「やっぱり、その顔は分かっていない顔かー！？ どうしたら私から食欲旺盛キャラが抜けるのかー……？」

「まあ、いいじゃないか。食べないより食べる方がいいし、おつきく育つぞ〜」

そう言つと何故かルーミアは両手で胸を隠した。そして何故か俺をきつい目でにらんでくる。

え、俺何か悪いこと言ったの？

俺は食べても食べても顔だからなかなか成長しないから、いいな〜と思って言った言葉なんだが……何故か受け取り方を間違われた……？

「くう……やはり、紅魔館の門番に秘訣を聞いておくべきだったのかー」

「そうそう急がなくてもいいじゃないか。もっとゆっくりしていけ

「ばいじゃないか」

「ゆっくりしてたらあなたが死んじゃうじゃ

ルーミアはそこまで言いかけて、突然言葉を引つ込めた。

どうしたのだろうか、と疑問に思っていると、ふいに後ろから声をかけられた。

「ゆっくりして行ってね！」

それはまあ、いきなり声をかけられたら驚くだろう。それも第三者にだ。さっきの言葉はしゃべりかけていたルーミアでもないし、俺でもない。

正直びっくりして親に見つかってしまったような、背筋が伸びたような気がした。ここであえて、何が見つかつたとは言わない。

「ゆ……ゆっくりして行ってね……！」

もう一度言われた言葉はさっきより音量が大きかつた。いやいや、さっきので聞こえてないと思う？ 俺は耳が痛い。

で、放置も悪いと思い、ルーミアと一緒に声のした方向を向いた。

そこには下膨れの金髪赤リボンがいた。正確に言うと『ゆっくりーみあ』がいた。

「え？ わたしのゆっくり？ はじめてみたなー」

もうちょっと驚くところだと思つんだが……。しかし一体どうしてこんなところにゆっくりるーみあなんて珍しいゆっくりが……。？ と、言つづいてもいい疑問は置いといて、こいつの中身は何なんだろうか？



なにあじのあんじですか。(後書き)

なあなあ、ルーミア×オリ主ゆっくりってどうだろっ？

無理だ。

わかれあり、そのうちであつたろう。

始めはどうしてゆっくりーみあ、という珍しいゆっくりがいるのだろうか、と思った。

ゆっくりの視点で生きていると、やはり人間の時とは世界が違う。昼なんぞはそこらじゅうでゆっくりしているゆっくりを見かける。大抵はれいむやまりさだったりする。

だから、ゆっくりーみあは見かけないが、ゆっくりだから特に不思議には思わなかったのだ。

が、よく考えると俺はゆっくりふらん。

同じ捕食種や例外を除き、自ら近づいてくるゆっくりは多くない。ゆっくりーみあは捕食種側だった気がする。だが、やはり同じ捕食種同士が近づいてもどちらもおいしくないのだ。

どうせ食べるなら逃げるだけのれいむやまりさでいい。いちいち攻撃能力のあるやつを襲うことはない。簡単でおいしいのは子供なのだ。捕食種の脅威も知らない。親から教えられていることもあるだろうが、それもただ人伝で聞いただけの話。おっと、ゆっくり伝か。

で、現在ルーミアの膝の上で頭をなでられているゆっくりーみあ。こいつはたぶん俺のゆっくりって単語に反応したんだと思う。

俺が「ゆっくりしていつてね!」と、返してやるともう、はち切れんばかりの笑顔で「ゆっくり! ゆっくり!」って飛び跳ねるんだよ。

そのときはもうコイツお嫁さんでいいや……とも思ったね。今は違うけど。

話がそれた。

つまりコイツの反応の仕方が子供みたいなんだ。まるで今さっき生まれたみたいないな感じ。わざわざルーミアって言う強大な力を持つ妖怪の近くに来る必要もないんだよ。

もし、ルーミアじゃなかったら……その場にいたヤツにもよるが良くて無視。

悪くて遊ばれて死ぬ。

だから、おかしいんだ。でも、その違和感に気づけない。

ふっー、と息を吐いて考えを止める。どうせ考えても仕方のないことだ。ルーミアとるーみあを見て思う。

(こいつら似てるなー)

たぶん俺も紅魔館の方に行ったら入れられるかな。絶対無理か。瀟洒なメイドに殺される。いや、その前に門番にばれてしまうだろうな。えっ、寝てるから大丈夫？

「この子髪の毛さらさらだねー。それにリボンもよく似てるよー」

言われて見ればリボンの小さな汚れも一緒のように感じる。あくまでそう思う程度だが。大体そういうのは持ち主だからこそ気づくのだろう。

なんて思いながら顔を近づけると、ルーミアに噛まれた。ほおが痛い。待て、何故顔が赤くなる。

そういえばルーミアって一回頭の交換してるんだっただな。

ビフォーとアフターを頭の中で思い返してみるが……全く一緒だ。気づいたときには生えていたから知らないがリボンも元通りだった。

ああ、そうなんだよ。一緒なんだ。飛んでいった、詳しくには俺をぶっ飛ばしたビフォーの頭と。

今笑顔で、少し顔の赤いルーミアのリボンが全く同じなんだ。なにを根拠に、と思うが俺の餡子を食べ続けているルーミアのことが分からないわけ無いだろう。言ってる悲しいが。

後ろを見る。

俺はルーミアのボディにビフォーの頭を押しつけていたんだ。くっつくなんてガキみたいなこと考えてな。

でも、生えてきやがった。妖怪の再生能力はこんなにすごいのか、と思ってしまう。俺もオレンジジュースと小麦粉で復活するしな。

話がそれた。この頭になってから少し考え事がきれいにまとめられないな。数学の問題は解けそうにないな……。

押しつけていたら急に吹っ飛ばされた。ビフォーの頭ごと飛ばされた俺は、後ろに木までとばされて、いつも通りのルーミアを見て、嬉しくなったんだ。

つまり、ここでビフォーの頭は置き去りにされているはずなんだ。

だが、無い。

ここまでくると誰でも察しがつくだろう。気づかないのはラブコメの主人公ぐらいじゃないのか。いや、あいつらむかつくほど鈍感

だがみよんに察しがいいときがあるのか。

じゃあ、ニューヘッドのルーミアか。

こいつ、ほればれしちまうぐらいにとろけた笑顔でーみあをなでている。俺もなでてくれ。

「ほん……つまり、このゆっくりーみあはルーミアのビフォーヘッドと言っことだよー！」

「へーそーなのかー。それで？」

……実際、その程度の事実なんだよな。ルーミアが言っとおり、そーなのかー、の一言で終わってしまう。

だが、考えてみてくれ。どうしてそのような事態になったか、をだ。

「ルーミア。一つ聞きたいんだが……これまでに記憶が飛ぶようなことはあったか？」

俺の神妙な雰囲気気づいたのか、るーみあをなでる手を止めたルーミア。それに気づいたるーみあも何事かと、顔を上げる。

「……そんなことは一度もなかったね。少なくとも、あなたに会うまでは」

やっぱりか。当然のように首が取れるなんてことはないよな。つまり、あの出来事はすべて俺が関与していると考えた方がいいのかもしれない。

というか、俺以外にあのようなことにする人物がこの場にいるというのか。

どう考えても、俺しか、俺にしかなり得ない。俺がいたからあん

なことになった。ゆっくりの特性かは知らないが、それとも俺特有のものか分からない。

この一文が俺の頭から離れない。

「俺の能力は“近くににいる者をゆっくりにする程度の能力”（仮）

……このまま一緒にいたらルーミアは危ないって言うことだ」

「……そっか」

沈黙が場を制していく。

俺は今も昔も自分が分かるほど生きてはいない。思いついた能力は間違っているかもしれないし、あっているかもしれない。

なら、と思うがあつていたことを考えると生きるのが辛い。これから先、会う人会う人に迷惑をかけ続けることになる。

そんなヤツは人と関わらなければいい。俺はただのゆっくりふらん。この自然の中でも……生きていけるだろう。まだ短い時間だけが、ある程度慣れてきた。

ゆっくりしかない環境ならば、誰にも迷惑をかけることはない。

ポヨン、と一跳ねする。相変わらずメルヘンチックな音しか鳴らないようだ。

そんな愉快的な音を鳴らして、もっと深い所へ。ゆっくりしかない所へと。

「はあ……行っちゃうのかー。それじゃあ誰がこの子の面倒見たらいいのかー？」

「謝ることしかできないな。ホント不甲斐ないよ。……俺からは、どうすることもできない」

「全く、ホント自分勝手なゆっくりふらんだねー。ただの、から自分勝手に変えたらー？」

黙るしかできない。俺は俺が分かっていなかったからルーミアに迷惑をかけて、そのまま立ち去ろうとしている。

ルーミアの言うことはすべて正しい。自分はなんて自分勝手なんだろう。

「はあ……返事もできないのか。それじゃあホントに自分に振り回されて、自分にいじめられたままだよ。自分勝手なら、自分を乗り越えて、自分を克服して、一人前になって、そのわけ分からない能力を制御してきなさいって言ってるの！……いつまでも待ってあげるからさ」

「ありがとよ……」

俺はルーミアの激励を受けて、深い森へと跳ねていった。いつか帰ってくるために。

跳ねて跳ねて、ルーミアから見えなくなったかな、と言うところで体全体で息をする。しんどい……。

だって、跳ね出したのにすぐ休むなんてかつこわるいじゃないか！！でも、もう少し早くに休めば良かった……。ほら、走ってたら疲れてきて休もうかなくて時に、周りに人がいたら少し嫌じゃない？

え、違うの。……そうなんだ、そう思ってたの俺だけなんだ。ま、こつというのが俺だから。こつやって自分を理解していくんだよ……待ってるよルーミア。



怪。八雲紫さんですね。

おお、カレー臭がする。違った、加齢しゅ……。

「今ならあなた程度のゆっくりなんて生きてまま地獄に落とせるわよ？」

俺のすぐした、地面に俺の体がぎりぎり通るかの程度に穴が開いている。

お、おちる……あ、ちょっと紫さん。頭をぐいぐい押さないてくださいよ。俺が地獄に落ちちゃいますよ。

「あら、私はあなたが地獄に落ちても何の問題もないのですよ」

ははは、無駄に丁寧な口調が笑わせてくれますねー。と、どうでもいいやり取りをやっていたのだが、紫さんが引いてくれたおかげで俺が死なずにすんだ。

体中は危険を知らせてくれたのに、結局俺は相変わらずだった。いや、我が道を行ってるから死んでくいはないんだけど、待ち人ができちゃったから。死ぬに死ねないんだ。

「全く、私は忙しい身なの。さっさと用件だけ言って、寝げふん……帰らせてもらいますわ」

今言った。たしかに寝、と。だが、そんなこと思っている暇はなかった。

彼女の雰囲気が変わった。これが大妖怪、と呼ばれるほど生きた者の威圧か……。

「幻想郷は誰でも受け入れます。それがゆっくりでも。あなたが何者だとしてもです」

そこで一度紫さんは区切って、

「しかし、あなたは幻想郷に認められていない。でも、あなたが一人前になるとき、認められるでしょう。その時、幻想郷は快く、改めて受け入れるでしょう」

認められる？ 幻想郷に？

どういうことが分からなかった俺は、紫さんに聞こうとしたが、

「それでは、帰らせていただきますわ」

すきまを開いてさっさと帰ってしまった。

途方に暮れる俺。悩みも増え、まるで傷心旅行でもして自分探しのOLだ。

本当にこれからどうしようか……。

どうしようかと悩んでいたらニユ、と空間が裂けた。

「一つ言い忘れていたわ」

うわっ！！ びっくりした……いきなり面前に現れないで欲しい。

「あなたの……確か、“近くにいる者をゆっくりにする程度の能力”（仮）だったかしら？ あれは少し間違っているわ。教えてあげてもいいけど……それではおもしろくないわね？」

少し違う？ ってことは少し違うが、ゆっくりにしちまうことは変わりないのか……。

「フフ、あなたががんばれば道は開けるかもしれないわ。幻想郷は平等ですもの」

そう言っつて紫さんは帰っていった。

彼女のおかげで希望はできた。これからやることは、多いだろう。しかし、場に残ったカレー臭がきつい……。

わかれあり、そのうちであつたろう。(後書き)

さて、これで妄想のストックが切れた。  
あるっちゃあるんだが短いのばかり。

まあがんばる。

ちなみにこれはわかれあり、であいありの復讐活劇だったらいいなー

あ、あと作者はルーミア×オリ主ゆっくりはあきらめてないからね！  
むしろやりたい！でも、どうせやるならばいくさんがいいなー

おなががすいてもせなかはくつかない。

呼ばれて飛び出て何とやら、甘党のゆっくりふらんです。

最近ゆっくりを食べても緑茶が恋しくなくなりました。人間だったときは、餡子に対して皮の量が少なすぎる饅頭なんて食べなかったのにね。

いや、大人になるにつれ甘いものを食べることが減ったような気もする。

子どもの時は綿飴、善哉、飴玉とたくさん食べていたものだ。では、子どもの時のようにたくさん甘いものを食べられるようになった俺はなんだろうか。

……子どもに戻っていると言うことなのか。

い、いや……大人でも甘味を取ることもあった。だから、俺は大丈夫だよね……？

あくまで舌が甘みに慣れてきただけであって、俺がゆっくりになっているわけがない。そう思っていないと、生きるのが辛い。

俺もいつかは頭の中がお花畑、いや、餡子まみれになるのだろうか。

そうなってしまうと、大切な人を忘れてしまいそうで嫌だ。絶対に嫌だ。

そうならないためにも……おっし、やるぞー！

さて、ほのかなカレー臭を残して去っていった紫さん。彼女が現

れる前と、彼女が去った後ではまるで空気が違っていた。

やはり、カレー臭カレー臭と軽口をたたける妖怪などではなく、本当に恐ろしい方だったらしい。

彼女がスキマを通して消えた後、大きな力を持った生き物が辺りにたくさんいることが分かった。殺気びんびんですもの。

紫さんという比べる方ができて、ほかの妖怪の強さがよく分かる。だが、比較する対象が大きすぎると天秤は大きく傾く。

まあ、どつちにしろ俺には勝てない奴らばかりだからすぐに逃げ出したけどな。

そういう風に勝てない敵からは逃げて、勝てる相手は確実に潰す。そうやって数日生きてきた。逃げられたのは多分、俺に対して関心がないからなんだろうね。

一人旅だと話し相手もなく暇である。なので独り言でも喋ろうかと思うが、そんなことをすれば誰かに見つかってしまう。仕方がないので、頭の中でカレー臭とっていると、空間がパツクリと裂けて、嫌な予感がした。

開いた穴からは目玉が覗き、気味が悪い。

これはどう考えても紫さんのスキマであろう。俺を成敗しに来たのか。だが、予想と反し穴から出てきたのは死ぬほど怖い九尾であった。

た、食べられてしまう……。

俺がこんな強い妖怪である紫さんの式、八雲藍さんに勝てると思うか！？ まず、勝つ負けるどうこの次元の話じゃないんだよ。

百面相をしていた俺を見て、少し苦い顔をしてから何事もなかったような顔をする藍さん。

「はあ、またあなたね。何度も言っているでしょ。ご主人様の手を煩わせないで」

「はて、こちらとしては何が何のことやら？」

「あなたが考えていることなんてご主人様はお見通し。よくまあ何度も懲りない」

実は藍さんと会うのは初めてではない。

幾度も頭の中でカレー臭、カレー臭と唱えていると、どこから嗅ぎつけたかスキマを通して藍さんがやってくるのだ。

これも式のさだめなのだろうか、本当にこの方しかやってこない。紫さんが来ることなんて一回もなかった。

「ご主人様はここ最近増えた妖怪の対応に明け暮れている。あなたも受けた。ご主人様は寝る間も惜しんでやっているの」

対応というのはこの前紫さんとあったときのことを指す。

紫さんはどうやらこの幻想郷すべての妖怪に『ようこそ』と、言っただけでいるらしいのだ。別段、俺が特別だったわけでもないようである。

「それに妖怪だけじゃなくて、最近人間の入りも多い。ご主人様は寝たいのよ」

「それで俺にカレー臭、カレー臭思われるのが嫌なのか」

「そんなこと思ってたの!? ……ご主人様のためにもこんなやつ3時のおやつにするべきかしら」

ゾゾツ、ゆっくりである俺にそういう脅し方は反則だと思う。それに、俺一人に手間をかけるならほかの奴の対応をするべきだろう。そう！俺なんか食べても現状は解決しないんだよ！

「でもね、ゆっくりはぼこすかぼこすか生まれてくるのよ。いつまでたっても終わることはないのよ……」

藍さんの顔が見る暗くなっていく。

まるで今までゆっくりの相手をさせられていて、それがいつまで経ってもやらされていたような顔だ。

「そういうことだからご主人様に迷惑かけないようにね」

俺が何か言う前に藍さんはスキマを通過して帰ってしまった。彼女も疲れているのだろうか。これからはカレー臭と、考えないでおこう。

しかし……ゆっくりの相手がそこまで大変だとは思ってもいなかった。いや、いちいち全員を相手にしている紫さんもどうかと思うんだけどね。

今回のことで、紫さんが頑張り屋さんだと言ったことが分かった。そして、ゆっくりがどれほど幻想郷に影響を与えているのかも。

増えすぎたものは減らすべきなのだろうか。

とりあえず紫さんには、ゆっくりにいちいち会いに行かなくていい、と言わなければならぬ。正直、ゆっくりの中で紫さんを覚えてるのは俺と数匹ぐらいだろう。

つまり紫さんの行いは無駄、と言ったことになってしまふ。

確かに、ゆっくりに常識を覚え込ませねば人間と、いざこざが起きてしまふ。しかしそれは、紫さんがするべきことじゃない。

よし、白蓮さん探しに行こうか。あの人ならやってくれそうな気がする。

白蓮さんを見つけるまで俺は俺で何かやってみようかな。

おっと、その前に『近くににいる者をゆっくりにする程度の能力（仮）』を完璧にしなければならぬ。

ただ、この能力は紫さんや藍さんと会っているが発動したことはない。何か条件でもあるのか……それが分かればもっとやりやすいんだろうけど。

ま、やることがあればやる気ができる。

やる気があれば行動できる。

まず、俺の意思決定は生きること。

そしてそこから行動選択するのなら、まずは自分を分からなければならぬ。

白蓮さんを探すのも、仮能力を押さえるのも、ルーミアとキャッキャウフフするのも。するべきことはたくさんある。

その前にまずは腹ごしらえだ。

彼女はとある土の下で生まれた。

そこは木の下に穴を掘った、小動物が住み着くような広さだった。辺りは薄暗く、夜なのか少し肌寒い。

そして、ゆっ、ゆっ、と嬉しそうな声が聞こえてくる。

彼女は思った。この声を聞いていると、ゆっくりできるんだぜ、と。

それが彼女の始まりだった。

親に姉妹に囲まれて、ぱちゅりーと言う親友にも恵まれた。

食事に困ることもなかった。

春はツクシが芽を出して、緑や虫たちがたくさんいた。初めて外に出たときは心躍るものがあった。彼女に世界を与えた季節だった。夏は深緑が生い茂っていて暑く、水がおいしかった。外で走り回って楽しいと思うようになった。ただ、汗をかいてしんどいとも思った。

秋は宝庫だった。

本当に食べるものに困ることはなかった。家には常にキノコや木の実、山のようにあった。だが、彼女の父も母も食べ過ぎてはいけない、と言っていた。

冬。

彼女にとってそれは嫌いな季節であり、同時に好きな季節でもあった。無論、彼女にとっては寒さは命に関わり、食べるものの供給を絶ってしまう。この時、彼女は秋に彼女の親が言っていたことが分かった。

雪が降り積もり、入り口も岩などで埋めてしまわねば風で吹き飛ばされてしまうような冬だった。だが、嬉しいこともあった。

家族とずっと一緒にいることができたのだ。それは外で動くことの好きな彼女にとって、ストレスを軽減できる大切なことだった。

春になり、ツクシがまた芽を出した。

彼女の母が食料制限を強いたため、家族で欠けるものは誰一人いなかった。母の親は、冬ごもり中に食料が無くなり、外へ探しに行つたきり帰ってこなかったらしい。

それを今でも良く覚えていて、秋はたくさん食料を集め、冬は節約して食べることを覚えた。

彼女は冬の間会えなかったぱちゅりーの元へ、会いに行くことにした。母に勝手を告げると、まだ雪解けが残る森の中を跳ねていった。

「むきゆ、きたのね。ぶじにふゆごえできたようね」  
「ゆへへ。ぱちゅりーこそだいじょうぶだったんだぜ？」  
「むきゆ、あなたにしんぱいされるほどやわじゃないわ」

二人は無事を確かめ合うように頬の部分を押しつけあっている。だが、ぱちゅりーの中身が少し冷たく、固いことに頬をつけていることで分かった。

ぱちゅりーにはやはり、冬ごえは厳しかったようだ。

「む、むきゆ、そ、そんなにくつつかなくてもだいじょうぶよ……」  
「だめだぜ！　ぱちゅりーはひんやりするんだぜ。ゆっくりあたたくくするぜ」

「むきゆ……」

ぱちゅりーは彼女に押し切られ、長い間頬を押しつけあっていた。段々と太陽が昇り、暖かくなってきたようだ。ぱちゅりーの体温も平温に戻ってきたようである。

「むきゆ、もうだいじょうぶだわ。ありがとうね」  
「ゆゆっ！　ぱちゅりーがげんきならわたしもうれしいんだぜ！」  
「むきゆ……」

ぱちゅりーの顔が少し赤くなる。だが、彼女は気にした様子はなく嬉しがっている。

そんな空気を変えようと、ぱちゅりーは切り出した。

「む、むきゆ！ はるになっただらするっていつていた『まほう』のべんきようをしたくないかしら？」

「ゆ！ 『まほう』だぜ！？ するせばちゆりー、おしえてくれだぜ！」

ばちゆりーはほつと息をついた。

この話は会うことになる最後の別れになるかもしれない、冬ごえ挨拶の時に交わした約束だった。

何とか話題を変えることにできたばちゆりーだったが、生憎まだ幼い彼女に教えられる『まほう』は少ないことに気づいた。

しかし言ってしまった手前、すぐに断ることはできないためにあの『まほう』を教えることにした。

「それじゃあ、よくきくのよ？」

「わかったんだぜ！ ばちゆりーのいうことはぜったいにわすれないんだぜ！」

「むきゆう〜……」

ボツ、とまたばちゆりーの顔が赤くなる。先ほどよりも赤く、りんごと変わらないぐらいに赤くなっている。

ばちゆりーはこのままでは話が進まない、と思い顔の両横で束ねてある髪を顔ごと振って、気を取り直した。

「むきゆ、きをとりのなおしてつづけるわ。この『まほう』はね、わたしがつかえるものではなかったの」

「だぜ！？ ばちゆりーでもつかえない『まほう』があるんだぜ？」

「むきゆ、わたしもばんのうではないということよ。その『まほう』にはてきせいがあるって、ひかりのものにしかつかえないみたいなの」  
「だぜ？ ひかりのものにしかつかえないってことはばちゆりーは

「いったいなんなんだぜ？」

「わたしはやみのものだったわ。まずはこの『まほう』をつかえるかどうかで、あなたのまりよくがどちらかしらべてみましょう」

ぱちゅりーはそう言って、まるで外国人がするジエスチャーのように顔だけの体で動き出した。その動き方はゆっくり以外が見れば、何をしているのか分からないような動きだった。

ぱちゅりーのジエスチャーが分かる彼女は、目を輝かせて一心にその動きを見ていた。

ふと、彼女はここで疑問に思うことがあった。

「ぱちゅりー、ひかりのものと、やみのものってなにかちがいがあ  
るんだぜ？」

「むきゅ、そのことね。それぞれまりよくのせいしつがちがうのよ。  
どちらもつかえる『まほう』がちがってくるわ。それにおなじせい  
しつどうしはあいしょうがいい、とされているわ」

ぱちゅりーの答えに彼女は何か納得したような顔をした。

「ゆー！ じゃあわたしもやみのものだぜ」

「むきゅ、どうしてかしら？」

「わたしはぱちゅりーとなかがいいんだぜ！」

「むきゅう〜……」

またもや彼女の言葉で顔の赤くなるぱちゅりー。このままでは中  
身が沸騰してしまいそうである。

して、この話は冬が終わり、春の始まりの頃の話である。

彼女は知るよしもないが、いつかの夜にとある一匹のゆっくりふ  
らんが生まれ、育ち、彼女の元へと近づいていく。

おなかを空かせたゆっくりふらんは、腹ごしらえのためにゆっく

りを食べる。彼女の人生の分岐点でもある日だった。

「さて……これからどうしよっかなー」

「ゆう?」

ルーミアはゆっくりふらんのことを思い出しながら、次にあったときのことを考えていた。ちなみにルーミアはゆっくりふらんが八雲紫に出会って、ケンカ売りそうになったことは知らない。

「んー、どうしよっかー。あれ? 本気ですることがないなー。いつも私何してたっけ-?」

「ゆっくり!」

「ゆっくりしてたかなー、あー。多分してたねー」

ルーミアは自身の能力である、闇を操る程度の能力を発動して周りを暗くさせていった。だが、その時ゆっくりるーみあの悲痛な叫びが響いた。

「ゆううううー!」

「え、なに。コワイのかー?」

「……ゆう」

「……ぷっ」

ゆっくりるーみあに暗くすることを禁止させられたため、仕方なしにどこかゆっくりできる場所を探そうとするルーミア。

そこではっと、浮かんだのがリグル宅である。そうと決まればと、



そのまま投げたゆっくりるーみあは回収せずに、リグル宅へと向かってしまっルーミアだった。ちなみに、リグル宅ではゆっくりるぐるが発生していて、阿鼻叫喚だったそうなの。

おなががすいてもせなかはくつつかない。(後書き)

長くなりそうだったので、最後のルーミアのをつけて投稿。  
次話はやめに投稿できるかと。

あと、“彼女”は次話で出てきます。

ホントは今回で出て来るだったんだけどね。

さらにあと、題名変えようかな。

これって東方って分かりづらい気がする。いや、分からなくてもいいんだけどね。

ひかりのものゆっくりまりさ登場！

おながが空いたので、空腹を満たすためにゆっくりを探している。そのため、森を跳ね続けている。

体は小さいんだが、よく食べる。ホント食べた瞬間消化してるの、つてぐらいに。全然太らないのも不思議だ。

しかし、油断は禁物。いつのまにかあごが四十五重になってました。なんて笑えない……。

感覚でしか分からないものだが、かなり跳ねてきた。

いつまでたつても木々は途切れることはなく、風で掠れる木の葉の音が聞こえる。

この体では移動できる量が少ないし、体力も低い。跳ね続けている、と言っても人間が走ればすぐに追いつくような距離だ。

そんな距離しか進んでいないのだが、幸運なことに茂みを挟んで前方にゆっくりの巣、らしきものが見える。

ゆっくりの巣は木などの根元に穴を掘り、地面の下で生活する。

まるでウサギのようだな、と思ったこともあるがウサギに失礼かもしれない。

ザッ、茂みからはみ出ないように帽子の位置や、羽の位置を確認する。うんうん、帽子にもリボンにも汚れはないな。

羽の宝石部分は他のゆっくりふらんとは違う、と自負している。毎日手入れを怠っていないからな。今日も髪の毛もヘンなくせはついでいないな。自慢の金髪である。

はっ！ いつの間にやらこんな帽子ごときや羽を大切にしている……うん、自分を大切にするのはいいことだ！

だが、手入れのしすぎで羽の宝石部分はきらめきすぎちゃいない

か。

自身の初期装備を見直し、ゆつくりを襲うための歯のチェックもする。折れたりなんかしたら大変だからな。

万全、とも言える状態で周りを確認し、茂みを飛び出て巣穴の横につく。もし、これがゆつくり以外の生き物の巣だったら、死んでしまっただろう。

そんなこともないように、入り口付近で仁王立ち（本人はそのつもり）をして、大きな声で叫んだ。

「ゆつくりしていつてね!!」

「ゆ!! ゆつくりしていつてね!!」

やった。アタリだ!

俺はそのまま巣穴に向かって突進する。羽が当たって土が削れる。ズサアア、と足の部分でスピードを緩める。こすれたので少しいたい。

薄暗い、土の中の巣にいたのは黒い帽子と赤いリボンだった。ゆつくりまりさとゆつくりれいむである。

数は……まりさが一匹、れいむが四、五匹はいるであろうか。突然の『ゆつくりしていつてね』と現れた俺を見て、驚いているようだ。

刹那のような時間であったが、十秒、いやもっと経っている。しかしゆつくり、これほど時間が経ってもノーリアクション。

人間ならこれほどあれば泥棒にあって、『泥棒ー!!』と叫ぶぐらいの時間は経っている。

どうしてゆつくりふらんがここにいるの? と言う顔をしているまりさと、何が何だか分かっていないれいむ達。大きさ共に俺より大きい。

一匹のれいむはまだ大人ほどの大きさではないが、十分に大きい。

まりさの方は俺と変わらないぐらいだろう。後は俺より小さいな。つまり、今現在この巣には親がいないと言うことだ。では、ゆっくりふらんの代名詞でも言ってみるか。

「ゆっくりしね！」

「うわあああ！？ ふらんだ！？」

狭い巣の中で蜘蛛の子を散らしたように一気にバラバラに飛び跳ねるゆっくり。しかし入り口は俺がいるため塞がれている。

ゆっくり達は自分たちでぶつかり合いながら、なんとか俺から逃げだそうとしている。

そこで、俺の目の前にまりさが立ちはだかった。まりさは何か決意した顔で、混乱しているれいむ達に呼びかける。

「ここはまりさがくいとめるよ！ おねえちゃんはいもつとたちをつれてにげてね！」

「そんなまりさ、むちゃよ！」

なんとこのゆっくりまりさ俺を前にして囿となると言い張った。これは……なかなかゆっくりしたやつだ。

「でも、まりさじゃむりだよ！」

「ゆへへ……こんなときのためにばちゆりーから『まほつ』をおそわっていたんだぜ。まりさはこれしかおぼえられなかったんだぜ。きつとこのときにつかうためなんだぜ！」

「まりさー！ー！ー！」

ゆっくりまりさは狭い巣穴の中で跳ね、天井ぎりぎりまで飛び上がった。まりさのトレードマーク、黒い魔女帽子が潰れる。

そして、そのまま自由落下するはずのまりさの体が止まった。不



家族のれいむ達を逃がすために立ち上がったまりさ。しかし、まりさのまほうはれいむ達の命を摘んだ。

ゆっくりと羽を広げて、ゆっくりしているれいむ達にすり寄る。そこでれいむ達の罵倒を受けて泣きじゃくっていたまりさがはつ、と声を上げる。今まで俺にまほうが効いていないのを気づいていなかったようだ。

「だぜ！おねえちゃん！　ふらんがいるんだぜえ！　ゆっくりしてるばあいじゃないんだぜ！」

「ふらんなんていないよ！　うそをつくまりさはきらいだよ！」

そりゃ、目を閉じていたら気づくわけがない。

まりさの必死の呼びかけにも、否定的な意見しか返さないれいむの前に立つ。目を閉じて、幸せそうな顔でゆっくりしているのが簡単に分かる。

俺は今まで、ゆっくりしているゆっくりを何回か見たが、これほどまでゆっくりしているゆっくりを見るのは初めてだ。

きつと野生で見るとは不可能に近いだろう。俺の種族的に考えて。

しかし、かわいい妹の呼びかけにも答えず、ゆっくりしすぎなおねえちゃん”はよほど閻魔様の説教が聞きたいらしい。

まあ、こんな状況になったのはまりさのまほうなんだけどな。

「じゃ、来世はゆっくりじゃなかったらいいな」

俺よりも大きいれいむを食べる。

歯が柔らかいゆっくりの皮膚に当たり、そのまま噛みちぎった。

れいむの側頭部を噛みちぎると、中から餡子が漏れ出してきた。

流石に俺でも自分より大きいゆっくりを丸呑みするのは難しい。

食べた餡子は口に入れた瞬間、きれいさっぱり消えてしまったみたいだ。しかし、いつもなら聞こえてくるはずの断末魔は何か様子がおかしい。

「ゆう〜？ ゆっくりいたいよ。ゆ！ あまあまさんだよ！ これでもっとゆっくりできるよー！」

自分が食べられてしまったことには気づかず、あるう事が自分から流れ出したあんこを食べ出している。

痛みといった感覚は食べ物で消されてしまうほどであった。

一体、このまりさは何者なんだ。

相手を極端にゆっくりさせてしまうゆっくり。これはゆっくりの本質なのかもしれないが、一方で気分を逆なでしてしまうこともある。

「ゆううううう！！ おねえちゃんそれはおねえちゃんのだぜえええ！？ ゆぐつ、うげえええ……」

姉が自分で自分を食るといった行動に耐えきれずまりさは嘔吐してしまっただようだ。げちゃ、べちゃ、とまりさの中身が落ちていく。

それに反応したのか、他のゆっくりしているれいむ達も集まってきた。

「ゆ！ あまあまさんのおいだよ！ これはれいむのだよ！」

「ゆう、ぶんぶん！ おねえちゃんずるいよ！」

「ゆう……げえ……それはまりさのだぜええ……」

「ゆう、あまあまさんおいしそうだよ！」

れいむ達の耳にはまりさの言葉はもう、届かないようだ。

……俺はさつさとれいむ達を食べることにした。それがまりさの救いなのか、そうではないかは知らない。

突き詰めてしまえばもとより俺がこの巢へ来たことが原因なのだから。

小さなつめき声が聞こえる。目を横にやると、ずいぶんと縮んだれいむがいた。さつき俺が噛みちぎったれいむである。

「ゆ…… ゆっくりできるよ…… あまあまさん…… おいしいよ……」

もう、先ほどの面影はない。髪飾りでしか誰だったか判別できないほど、顔が崩れている。

流れ出た中身を食べる、また流れ出るを繰り返しているのだが、段々と噛みちぎられた部分は広がっていき、中身は遠くへと流れていってしまつ。

ろくに動くことができないれいむの体では周りにある餡子しか食べられないため、これほどになってしまったようだ。

「……、ちっ……」

「ゆ…… ゆっくりでき…… よ」

情け、と思う気持ちでゆっくりれいむを踏みつぶす。

そこにはひしゃげて、餡子まみれになった赤いリボンがあった。

れいむのことは俺が中途半端で食べたせいの結果だ。

それは命を侮辱している行為に当たるのかもしれない。

『いただきます』、この言葉の意味が人間の時よりも深く分かったかもしれない。食物連鎖の底部にいるからこそ分かるのかもしれないことだ。

相変わらずキャツキャワイワイしているれいむ達の方を見る。先ほど見たときより、落ちている餡子の量が多い。

それに気をよくしたれいむ達はゆっくり餡子を食べている。

「ゆ……う……ゆうげえ……おねえちゃん……」

姉を潰された光景が見えていたのだろうか、嘔吐は止まらずやせ細ってきているように見える。……すぐに食べてしまおう。

「『いただきます』こんな言葉を今になって言うとは思わなかった」「だぜ……やめるんだぜ……いもうとたちにゆびいっぽんでもふれてみるんだぜ……そのときはまりさがだまってないんだぜ……」

小さなゆつくりから見たら、お菓子の山のように見える餡子に群がるれいむ達。目を閉じていてゆつくりしていても、においや感覚で分かるのか迷わず口に含んでいく。

まずは手近にいた拳一握り分ぐらい大きさのあるれいむに近づくと、上からまりさの叫び声が聞こえる。

段々と、ゆつくりしたい気持ちは変わらずに強くなっていく。

ぱく。本当にその一口で終わってしまった。食べた、と言う実感がない。まるで、高級な肉を食べたように一瞬で消えてしまったみたいだ。

口を開けて舌を出してみる。そこには何も残っていなかった。

舌を出したままでいると、餡子を食べるのに夢中になっているれいむが舌の上に乗りがつってしまった。

大きさは俺とそれほど変わらないため、舌が潰されてしまう。

「ぐ……え……」

舌を踏まれているため、うまく発音することができない。このままでは本当に舌が引っこ抜けてしまう。

舌を引き抜こうと、力を入れると勢い余ってれいむまで持ち上げてしまった。

俺の舌筋すげえ！　だが感心してるのもつかの間、れいむがボールのように転がってそのまま俺の口の中に入って行ってしまふ。

「ゆー！　せかいがまわるよー！」

「もが　！」

このままでは口に入りきるわけがないし、入った　としても俺の体が内側から破裂してしまう！　しかし、手を打とうにもすでにれいむは口の前。

まさか死に方が内側破裂なんて……今からそちらに行きます母さん……。と、思ったられいむが運良く歯に引っかかったぞ。

ポキッ。

だが自慢の歯は軽快な音を鳴らして折れてしまった。本当にもう無理そうです。

「むぐっ！　……むぐ？」

閻魔様に会うのか、と思っていたら、口に迫るれいむは見えず、口内には甘い味しかない。れいむは一体どこに行った？　と、考えていた俺はまりさの声につれられ上を向いた。

「だぜ……？　い、いまいつしゅんでいもうとがきえたんだぜ……ふらんのくちにはいったとおもったら、すでにきえていたんだぜ……」

……

……俺はもう、これしか思いつかなかった。

単純に発想だが、こんなものしか残らなかつたんだ。いや、確信に近いものもある。それは何より俺がゆっくりで、ふらんと言つこ

ともあつたからだろう。

『口に入れたものを一瞬で消化する程度の能力』

まるですべてのゆっくりに実装されてそんな能力だ、ある意味ゆっくりらしい。と言うかこれ、デフォルトじゃあないの？

俺の『近くににいる者をゆっくりにする程度の能力（仮）』よりも使い勝手がすごく良さそうなんだが、能力って複数あるものなの？

新たな自分発見はおいといて、残ったれいむ達を完食することにする。もう残っているのは一、二匹だ。残していても仕方がない、だから食いは太る原因でもあるからな。

いつまでも餡子を食べることに夢中なれいむ達に近づいて、舌で二匹ことなめ取るように口に入れる。

口の中で何かが動く気配はなかった。完全に消化されてしまったようだ。

そして、この巢の中には俺と、まりさしか残っているゆっくりはいない。だが、それでもまりさはひかりまほう、カツコイイぼーずをやめるつもりはないらしい。

俺は食事中にゆっくりする気はないから、まだ持っているがそれでもなかなか押さえられるモンじゃない。

「おい！ さつさとそれをやめるんだ！」

「だぜ……やめれるならすぐにやめてたんだぜ」

「なんてこった」

こいつ、発動はできてもやめることができないなんて。このまほうを教えた奴出てこい。……この場にはいない奴に当たっても仕方ないか。

なんとかこのまりさを落としたり、解除されるのだろうか。ざっと見てもジャンプするだけじゃ、届かない高さにいる。

なら、羽を使えばいいじゃないか！

正直この羽に飛ぶことのできる要素があるのかと言えば全くない。しかし、俺はゆっくり。ここは幻想郷。

重りにしかなくていないような宝石部分の羽根も、関係なしに俺は宙に浮いた。

「だぜ！？ く、くるんじゃないんだぜ！ ゆっくりするんだぜ！」

結局、こいつ自身で家族を殺し、俺がそれをいただいたってわけだ。

このゆっくりまりさはまだ頭のいい方だ。それが分かるかは、またこいつ自身で考えなきゃいけないんだろうけどな。

「だぜ！？」

空中で何とか体当たりをしかけ、まりさを落とすことができた。

まりさは地面で二、三回跳ねた後、こちらを向いた。

「だぜ……おねえちゃんもいもうとたちも、もういないんだぜ。おあさんもおとうさんもだぜ」

「でもまだいるんだろ？ そのまほうを教えた奴が」

「だぜ！？ ぱ、ぱちゅりーはしんでもやらせないんだぜ！ そのためにもここでふらんをたおすんだぜ！」

「えー？ でもまりさが負けたら、ぱちゅりー食べられちゃうじゃないの？」

「だぜ！？ こうしちゃいられないんだぜ！ すぐにぱちゅりーの

「ところに行くんだぜ」

まりさは俺のことなど見向きもせず、出口へと跳ねていった。何故逃がしたのか、と言うと『まほう』を使うゆっくりなんて珍しいからな。もう少し見ていたい。そんな娯楽のためである。そんな娯楽がなければストレスで餡子を吐いて死んじまうよ。

さーて、お腹もふくれたし一眠りしてまた行くか。

「そっぴい俺、歯が折れてたんだ……。どうやってゆっくり食べればいいんだ……。」

「そっぴいのかー。じゃあいきなり目眩がして、気がつくとき家の中にゆっくりぐるがいたのかー」

「そっぴいなのよ。まさかゆっくりが入ってくるなんて思わなくて。それに自分のと来てね。どうしようか慌てふためいていたときに、あなたに来たの」

ルーミアがリグルの家に来てみれば、そこではゆっくりぐるどリグルの追いかけっこが行われていた。

「ぐるぐるは器用に足を動かして、リグルの手をかわす。そんなことをしていたら、家があるのは当たり前のこと。」

「今しがた来たルーミアとぐるぐるを何とか捕まえて、掃除を済ませたところである。」

「びびりー」

「ゆっくりー」

いつの間にか戻ってきていたゆっくりーみあが、簀巻きにされているゆっくりりぐるに話しかけている。

それをのんびりと見ているルーミアはふと、思った。

「まさか貴女までなっているとはねー」

「えっ!？ って言うことはルーミア、貴女もなの?」

「そこが不思議なんだよねー。今のところ私が知ってるのは、私とリグルだけ」

「えーっとうとういうことが分からないんだけど……」

事情を知るわけのないリグルに、ルーミアは手抜きの説明を簡単に話した。

『これは彼、ゆっくりふらんによって起きたこと』だと。それがにわかには信じられないリグルだが、こうもなってしまったからには信じるしかない。

「今の私とリグルにははつきりしない共通点があるの」

「まあ、二人だけじゃ考えようもないからね。もつと同じようなことが起きてる人と、おきてないひとがいなきゃね」

「私と貴女は彼の中身を食べているの」

「それが共通点? それなら触った、近づいた、喋った、思った、何でもありじゃないの?」

ルーミアの言う可能性もないわけではない。だがリグルの言うとおり、一つあげればきりのないものだ。

「いいえ、これが一番可能性が高いの。あんな強力な能力、ただでできるわけないじゃない。相手の体に影響を与えるなら、何かしら媒体がある、と考えた方が堅実よ。だってその方が効力が大きいじ

やない」

「……、確かにそうだね。でもそれだけじゃあそれが正解とは限らないよ。全く、『近くににいる者をゆつくりにする程度の能力(仮)』とはめんどくさい能力だね」

ルーミアの言うことも一理ある。しかしそれだけでは足りないのだ。

彼女らは知らないがふらんは八雲紫、藍と言う人物とも出会っている。確かに彼女らはふらんの中身を食べていない。

だが、それがどうした。

もしかしたら時間、と言う可能性もある。両者ともふらんとあっている時間は短い。ルーミア、リグルとも長い間ふらんと居たからそうなった、と言う考え方が一番かもしれない。

だが どちらとも、と言う考えもある。

「ふうー、なかなか分からないものかー」

「簡単に分かったら、彼自身で気づいているだろうね」

腕を伸ばし、気を抜いてリラックスする二人。

ルーミアの頭の中は、ひとまずふらんのこととは置いといて、自身の元頭部であるゆつくりーみあに注がれた。

「わたしのゆつくりってさー、かわいいと思わないかー?」

「何言ってるの? まだ、私の方が……ん、んー、かわいいと思うわよ?」

「それはない」

簀巻きにされて、ぴぎぴぎ泣いているゆつくりりぐる。

まあ、確かにそうかもしれない。

ひかりのものゆっくりまりさ登場！（後書き）

今年はまだ更新できないかも。

お詫びとして受け取って！

『焼きそばパンにブルーベリージャムをかけるとおいしいよー！』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2950m/>

---

転生したら史上最弱の妖怪だった

2011年10月7日02時49分発行